



純伊國名所圖會

江戶  
海郡



紀伊名所圖會後編卷之四

目錄

- 湯淺莊
- 御茶屋跡
- 團王神社
- 明惠真蹟
- 為摩馮子圖
- 湯淺驛
- 湯淺氏故居
- 湯淺醬油
- 白燈丸子圖 射像
- 本勝寺
- 滿願寺
- 吉川村
- 田村
- 田坂
- 詔宣古圖
- 方寸子圖
- 月見石
- 湯淺系圖銘記 湯淺系圖 銘記 湯淺系圖
- 玉井子圖
- 福藏寺
- 寶林寺
- 傳樂寺
- 逆川
- 枇杷
- 白上子圖
- 白神磯子圖
- 頭圍神社
- 澄師
- 諏訪神社
- 仙光寺
- 入江子圖 松原
- 白方子圖 宿所
- 逆川王子
- 森崇基故居
- 絶無畏寺子圖
- 毛無鳥
- 駟馬圖
- 石侍
- 湯淺氏故居子圖
- 深尊寺子圖
- 真樂寺
- 本系石子圖
- 久米子圖 王子



湯淺城蹟

廣川

天國劔

天神社

鷹嶋

井関驛

馬留王子

先代八幡宮

鹿瀬山

海部郡

蓬萊

戸津井

大引浦

靈巖寺跡

廣橋

八幡宮

立神

廣城趾

井関川

津木坂

岩淵社

井関山

衣奈子莊

衣奈八幡社

小引浦

由良莊

穴地藏

養源寺

男山陶器

かへ岬

能仁寺

幸山八幡宮

上草瀧

觀音堂

鹿背城蹟

由良坂

縁起一箇

白崎

興國寺

廣莊

帛印判

法藏寺

貝化石

井関王子

河瀬王子

藤瀧

鹿瀬名司

法華壇

鷺林寺

黒鴻

海瀬鴻

興國寺

東泉寺  
接鴻  
宇佐八幡宮

修善尼寺  
妙見宮  
柏村  
由良湊

莊天神社  
長谷寺  
沙撈明神  
河戸浦

白山權現  
沖教海  
小杭  
富鴻

湯淺莊

七ヶ村を流る中吉川  
湯浅の二村をたふり

吉川村

赤桑山北側の麓にありて村中を  
流る吉川をたふりて吉川をたふり  
施無畏寺蔵

余を脱去 立さうさまの村因  
字とすのいせ

西平九ねん 押十二月 さるさや

逆川

源ハ湯浅村界北尾より出て吉川  
湯浅二村を極く濁り入る中  
此川をたふりて吉川をたふり  
源ハ逆川といふ

民部卿為家

源淳國

逆川王子社

吉川村小川の一村の南にありて  
神ありて神をたふりて  
源ハ逆川といふ

又凌嶮岨昇イトが山下山之後  
参サカサマ王子 水逆  
流河有 此名云云

小結ぶ系鹿の山のみを  
川くらねよ小後之をみぞ

○御茶屋の 日村此細中より長野寺

日村 昔川村より山を渡りて西の海傍にありて山の中四神を以て

産物批把 日村の宮に子孫を授けて居りて味抱てより一帯を以て

森九郎景基故居 日村より東に八海傍にありて田村極楽寺を以て

つり湯川を以てより津島

國主神社 日村より北にありて

國津神

嘗社古くより久授は宮といひ傳ふ久授を團極して

肥後ふれ登り寛文紀小上古吉野此小極人來りて此地小

紀るといふ 又社傳小天曆一年大和國三輪臣の才河於播磨といひ

浦邊より紀伊に同年十一月小播磨司十田浦小來りて登極して

急其後の巖窟小法坐りてといふ文永七年湯淺氏の裔

森兼以地小遷りてされといふ 村を遷来

回坂 又田村坂といふ田村より極東

白上峰 又坂より東極東田村の界小ありて山三峰ありて白上中白上西白上といふ

東白上率都婆銘

金剛藏菩薩 建久之頃蟄居修鍊之間

西白上率都婆銘

文珠師利菩薩 建久之頃遁本山

建久之年此秋荒中の交を辨りて尾山を出てを教と

ひ佛像を荷ひて紀別小日向とて湯淺の極東村白上峰小

一字此草庵を撰て心住次其山のる白峰密教業と

て磐石邊時つて東西を長く志て二丁洋南小を撰て

版築ありて峻嶺の巖上二間の疏庵を立川前八海小對し

河波極傳をとりて雲濤漸起といふ眼海霧張り南の幽谷と

一本明惠傳云

施無畏寺

重陽衡雨遊施無畏寺  
 四顧塵煙斷鳥啼  
 白日閑只聞清梵  
 響寺在老杉間  
 石齋青苔秀崖傾  
 野菊香滿城風雨  
 日古寺過重陽  
 上街邦彦



南紀風雅集  
 絶無畏寺  
 白上山下極東村以くり云云  
 宗古或於別梅尾云云云云  
 北園仲温  
 淨香象護真孤洞水  
 合脩竹晚寒林露深  
 借問誰能參妙理山僧共語出壺心  
 自註云明惠上人始建寺我鄉白神山寺  
 記稱上人夢典文珠大士語將別攬觀尾  
 明公卓錫白神山法界風烟接海濤  
 金貌留偈積巖陰攢松畫暗濤聲  
 借問誰能參妙理山僧共語出壺心

當寺ハ明惠上人練形せし白上山に據れ據れ小て當和東九郎  
 景基此地を卜志て一堂を建立し上人を居清して供養  
 此繞道を菓原浦子辰へ永く便橋設生れ菓を採斫し  
 て供養れ布絶小擬く生類れ畏も無きと絶しり云云

寺と絶無畏寺と号せり上人此滅後小中子信彼  
 親像を安置し一室を寄附す八好造記小んんんん  
 今於境内山林涂地小志て奉堂冥山師親堂寶藏法  
 守甚日社建りて四面楓樹多し又奉堂此海小上人  
 手植せし那本枝松也古本何し小天保十四年九  
 月十一日未刻山崩して其古本等傾れり奉坊を堂  
 舎れ下小河より西南此海小向し毛無前原の鳩を  
 小あもとくづく齋僧思鳩をやく絶してとも小試を  
 此法系を如く浪の響れ多ると上人の心をまを  
 當和れわもげん小流び目小んんんんん懐意の情  
 を起せり又藤系景基が寄附状小於中一門四十九頁  
 草名を書連して上人加おせれ文書及是拍乃實銀

深依中門之表大和  
頌才考 功 出 為  
本寺少堂 供養 寺 同 以  
長如 判 子 也  
宣統三年六月十七日 在 供 養 之

紀四編甲六

湯壽正法果原村施無畏寺

法門高界



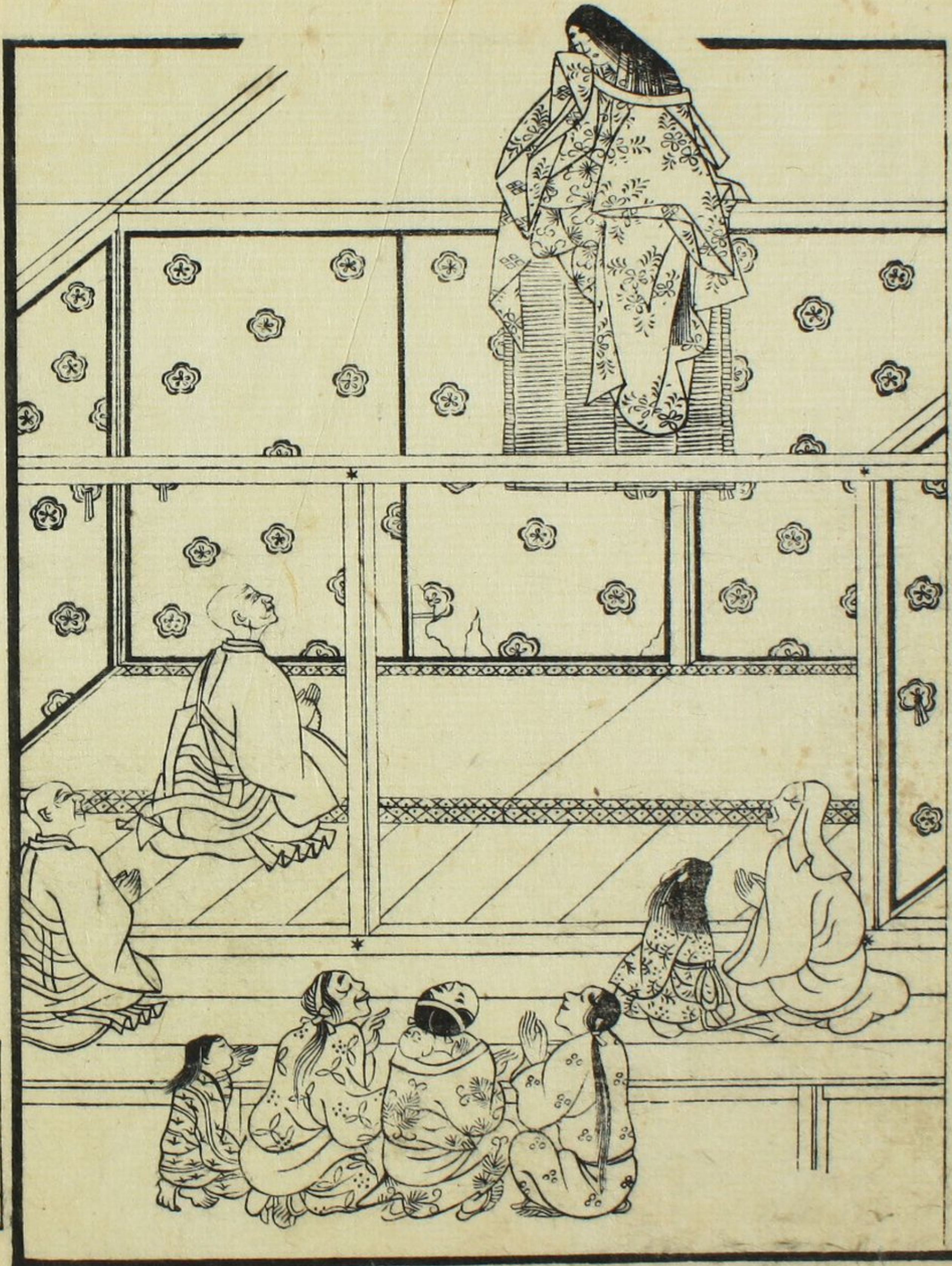
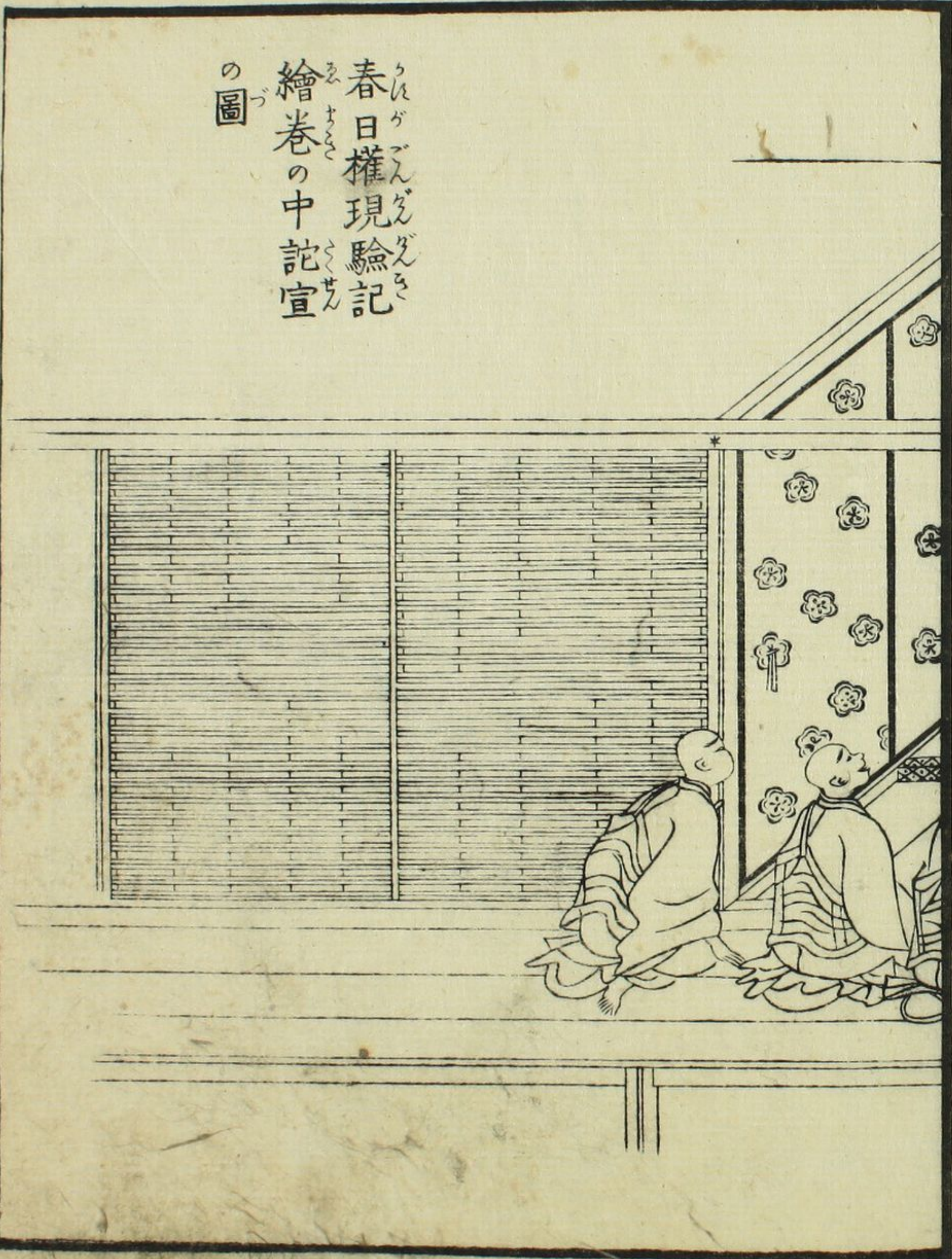
四至

山 限 東

明惠上人真蹟臨寫



春日権現験記  
 繪卷の中託宣  
 の圖



春日権現験記  
 繪卷の中託宣  
 の圖

入法字みね花の物さく次其他古陀文古券教百巻  
を藏ししは好古此一物ともねりて文雅風景  
備れ精舎なり

梅尾の明恵上人と十玄孫起此風煩惱のちをさく  
六相系融此月観念此意不わがらつたなり  
福回として気生れ依怙さるべきそれ  
ゆりしる志を以て倭國白上といふ不  
さらむら小湊海北親ら  
仁二年正月十九日より八日目の留水  
母かまひ候家此れも此れ不食此  
小親色よとてたかたも決つねよ  
日湯をらみく演壇を佛しけり  
あれるも小くも可べし

白神しらかみ

今在赤浦とつ山の上の山新海小八

のりとも彼もなり

二空此境界の心こころついで世法せぽう公こうもさゆむとつひ  
けりて女六日午時にさるまむしを清みれも  
わのりへみちちけり其小のわりの  
是喜日大の神なり清坊しやうぼうれ  
まげりしつら此の制せいし  
糸いととこれあり清坊しやうぼう者もの人ひと不ふ傷やうれゆ也清坊しやうぼうを係けい  
くしてまつる人をばみま系けいも續つづさるるなり時ときハ南都なんとの位ゐ系けい  
へもきたるせとあべりし位ゐらねと上人じやうじんとてけり  
六の作しやうをうり清坊しやうぼうをどむじべりし申まうさるそれ  
時ときくもよりをりさせたもの懐妊くわいじんの人ひとなりとをりのなり  
いさうとさわりねりし此清感しやうかん候こうもとを寂然じやくぜんし  
飛ひ鳩たうの羽うをふるかや  
下文くだり小こも日ひ取とり作しやう室しつ

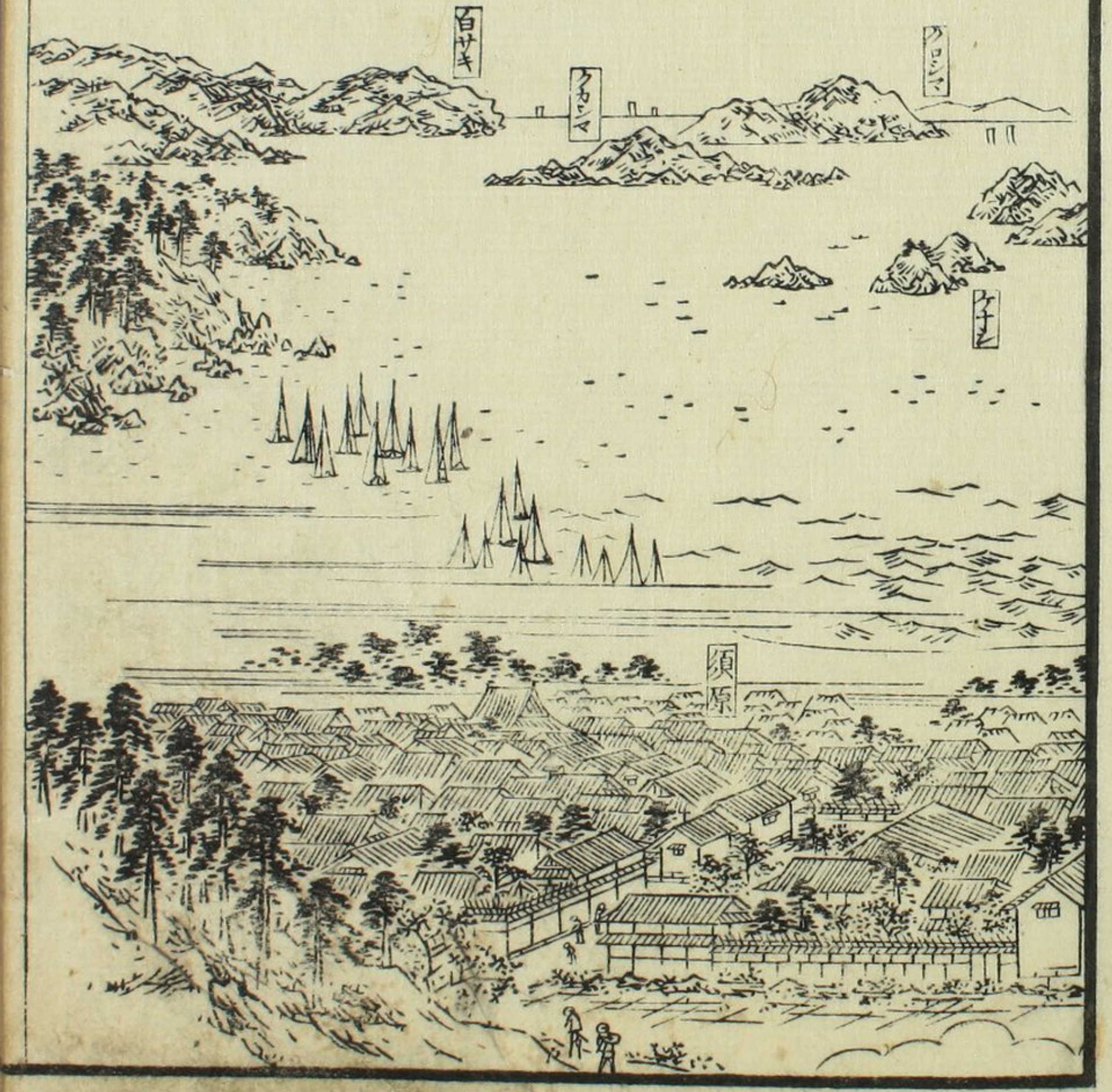
白神儀  
眺望の圖

須原々國內豪  
富の兼淵はして  
皆これ陶朱倚  
頭の徒もつと  
ごも牙謂江戸  
抑持をもつ賣  
買貨殖の産業  
彼地子て営々  
故ふ一なる此邑



中々入者ハ茅宅  
美麗なるに眼と驚  
一却て又瀟洒じ  
る市氣なるも異り

水神の  
いそが  
たらしめ  
たらしめ  
たらしめ  
たらしめ  
水崎久道



湯羅之耶塩乾雨祁良志白神之儀浦箕乎敢而榜動

按之る乎古年宴淫泉御幸乃の今之系系山の官道よふと西ふてつる  
揚系へ城を乃るふとて浦よと舟ふて由良へ渡りて多入りてん

文明千首

序つて天保六乙未年鯨魚多く浦小来りてりり

舟とつてりり

松廬遺稿

去年臘末巨鯨數十聚湯淺栖原之海時々浮鼻  
竝額游泳驅逐高處臨之可窺其奔躍兵正月旬  
八共痒不平舒欲釣南登霧崎磯而觀之  
西腕痒不平舒欲釣南登霧崎磯而觀之  
洋風定平如砥凝碧狀天反成紫雲際皓曠杳無窮只  
有土依山一嘴去折探尺紅珊瑚忽驚仙窟有耶無寒  
裳飄然風去折探尺紅珊瑚忽驚仙窟有耶無寒  
黎破碎然風去折探尺紅珊瑚忽驚仙窟有耶無寒  
然噴潮海可怒立巨鯨奮躍六合飛瀑白奔發星盤  
關押闔或又喻眼光灑血射紅日青電爭奔捉月明一  
渦掀翻虹龍宮嶽沒山崩射紅日青電爭奔捉月明一  
夜跨汝朝王京我亦唾手製其尾將欲攀九宵挽長庚  
須史波激海色錄晴帆遙瀛州鵠下視垂天鵬翼端

益知方寸宇宙寬振衣長嘯日已落天風颯々蒼髮寒  
垣內保定

傷其非正月鯨魚數十來集栖原之海予作鯨魚來  
鯨魚來栖原之海淺鯨常銜蹄滯輒鮒汝當悔  
橫海之志何所施撼山長鬣徒磊砢山人傷之為裁詩  
鯨兮鯨兮慎勿陷禍機世路崎嶇不可近淳朴古風今  
皆連吁嗟麟介之族何荼毒短鋌長鏑尾汝窺獨有南  
溟堪窟宅一帶豫山翠如圍好潛此間莫輕出待我騎  
汝朝紫微

毛無鴈  
白羽の成りて十二河原海上小降り 岬  
たゞ 峯嶼小志て 鏡て 暮本り

新産鳥  
日不二十河海上小降り

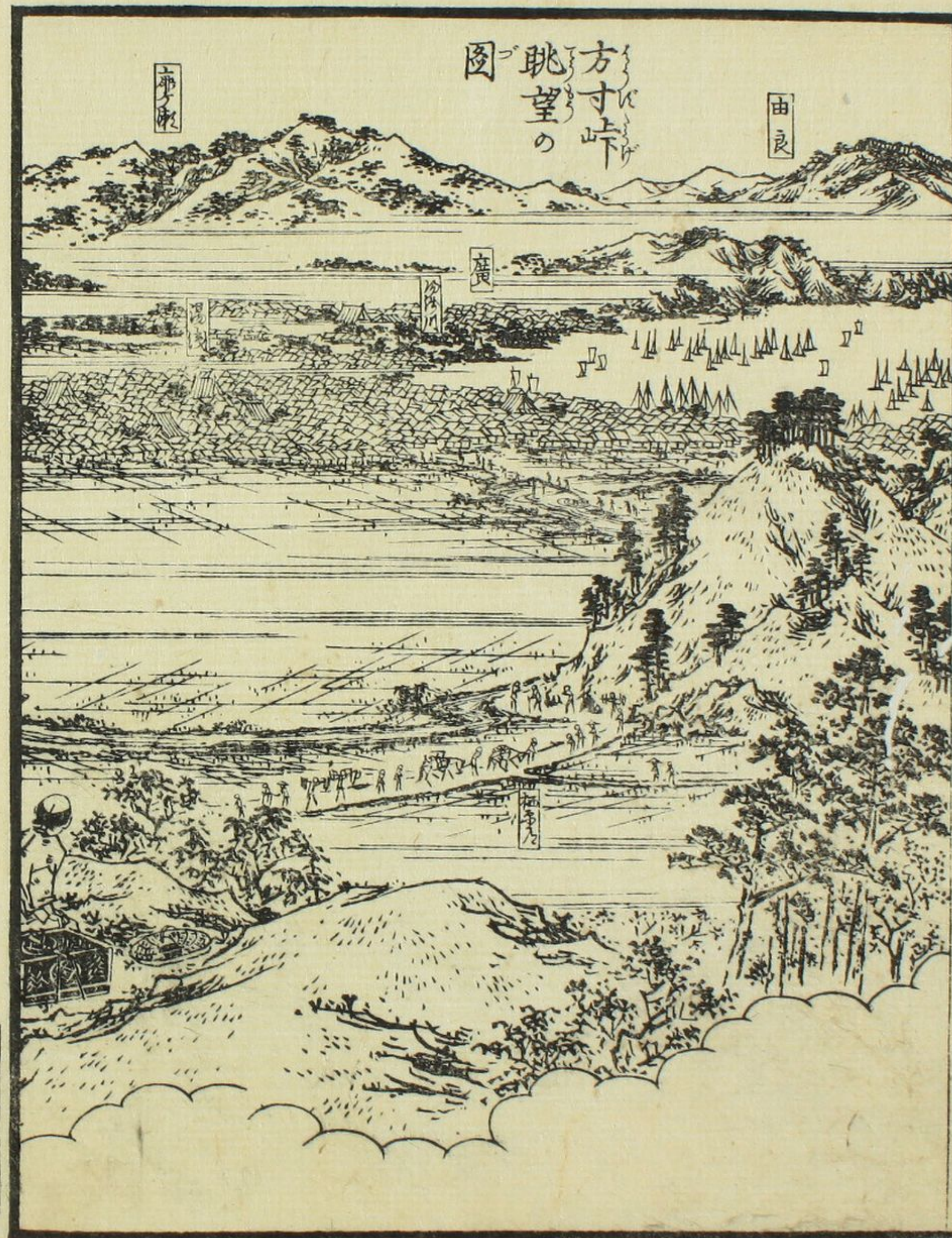
當此上人の海小抱ひ多ふ其名を新産とて月小傳ひて  
船小なり風小狂せて海小波る極自光を滄海の浪小  
輝し松風響を巖此指小傳ふ世情の便又泊客抱旅の  
真を憐れ次とてとも懸縁對境し其心を細めさる  
る一建久未此頃紀別小下向次湯淺の海中小二傳りり  
南小相益ひて其る三巴丁むかり以鴈を東海長く南小

詩聖集  
 刈藻島前湖欲廻  
 洞門波濺響喧歷  
 送將昔々笑曠去  
 迎得娟々素月來  
 詩佛老人

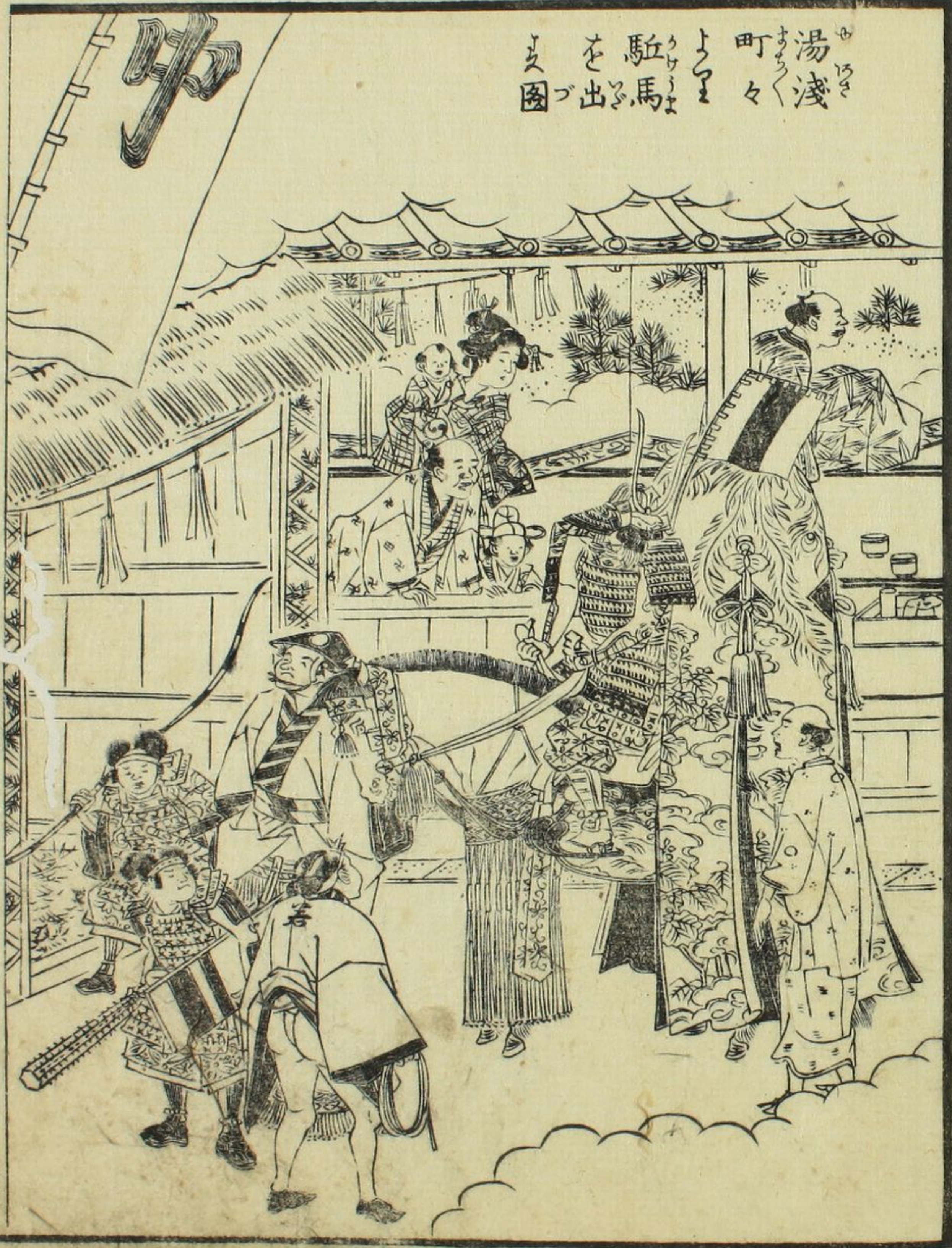


刈磨島  
 岩穴東西へ  
 貫るくくあり





湯淺町々々  
馬を馳せ  
出づ



經一陸地より一里許を過ぐ河中小舟にて又南二十丁  
許を去りて鷹渡久後急所より西角小舟ありて是より  
巴國北濱をぐる西方を海岬大崖と連れり西天の境濱  
るるれは急暴の息を色むる小使所より上人と道忠僧都  
并小喜海と二人相共小舟の傍小舟ありて是れをゆりて  
六日後来るるるより均東次南所廣徳の南端の西  
向の洞小舟小舟の板をゆりて是れ小舟を小舟と西  
日向して釋迦像一鋪を懸けきりかの舟前小舟於て濱  
金備六日此所の食より一匁水一桶砲一筒なり

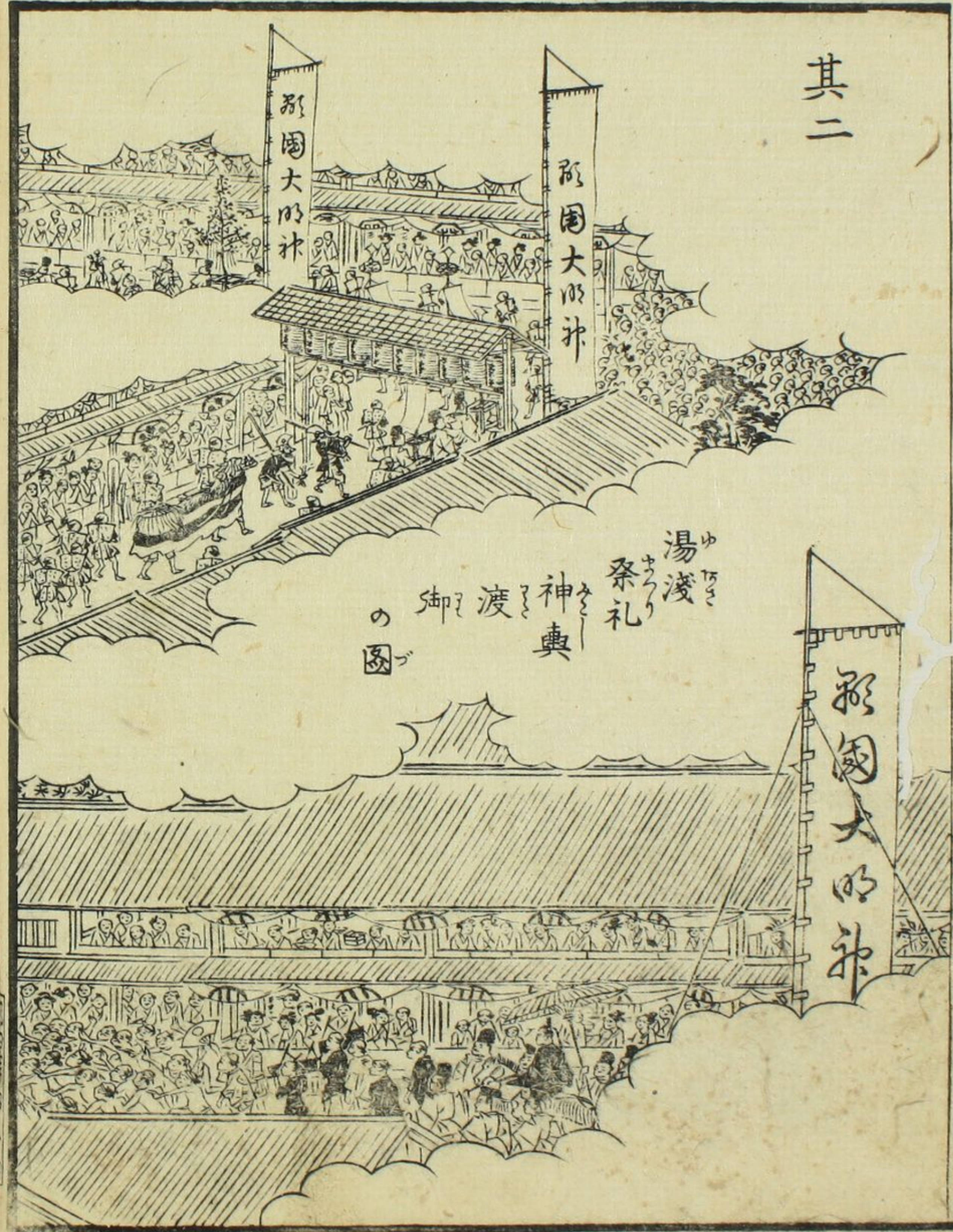
○方寸作 古名を御を板とつていへば是れとも新嘉坡小舟も及んば次がやつり  
又云古の山の本北林を板を懸けきりては湯淺村の  
又云古の山の本北林を板を懸けきりては湯淺村の

顯國神社 湯淺村の長田中子より長中田村の  
當社をいつれ世より田村小舟次國津神を勧請せし小寛文



江南竹枝  
 九月南中祭土神青龍  
 白虎畫旗新滿路紅塵  
 玉驄躍萬人爭見鐵衣  
 人海莊處士

其二



湯淺  
 祭礼  
 神々  
 渡  
 御  
 の  
 図

顯國大明神

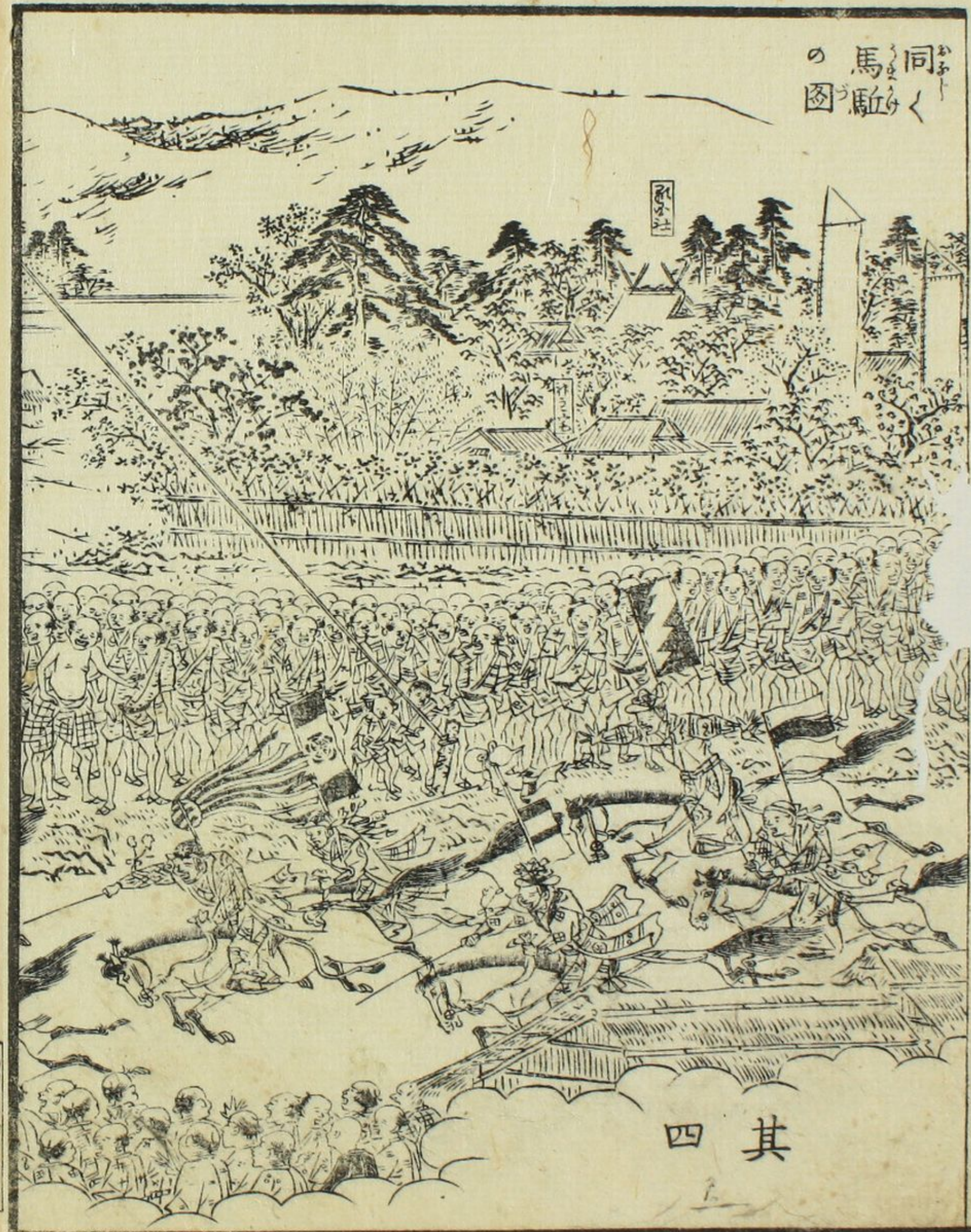


幸<sup>あき</sup>同<sup>どう</sup>の<sup>の</sup>旅<sup>たび</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>



其<sup>その</sup>三<sup>さん</sup>





年中 官命ふとるて 忍隠神 梅屋一 李梅溪と  
て居居れ顔をか勢と多り志ありしよりこれと社  
敷をを造ひて後とれり

○湯濱驛 文系紙より一里坂乃小町の町を乃  
町内より入其北市街の名今略以

湯濱の驛に忍野氏の調候子居て市野旅舎軒と連ね  
来常小絡譯とて海邊と遠近の高狹風小送て出入  
此溪艇と船と舟とて更なる事あり実小海陸橋  
の地とて古湯濱氏此地小居一頃甲冑此良之り  
て其名四方小つとるも古書小見えもより  
此村落中を河と流へともんや天正年中海濱小石垣を築  
入江の松系を并とるも以来高貴市街とるも  
にかよひ寛永十二年更小石とて海小築出  
地と冥とるも戸敷と小倍一過小郡中此旅舎

とらるれとれ小建保建仁の頃和歌の御會り  
元文元年小涅槃會を修せし宗景入道が石倚の旅  
と市街乃密小埋没し今これを尋る小由あり

明月記

寛喜二年正月十六日己酉今日人々物語云少將頼氏朝臣  
参熊野於湯和左宿与其侍後見左衛門尉合枕卧之間燈消  
眠覺忽聞奇音驚起秉燭見之件男顔如手被斬唱念佛二聲  
即死少將雖悲歎猶遂参詣云甚不可然事歎昨今已下向云  
聞事跡只共人之中所為歎

月見石

湯濱飯治町東側の人家の裏小井り建保四年八月  
或人ハア又小町の裏小井り湯濱の  
附以多を供仰せし中

建保四年八月廿日五首御熊野詣  
後鳥羽院御集路次當坐和歌湯濱宿

勢より神のやれ山橋さるを風の向もあふ  
かこ山の村のやうと大雲つとる人の夕月夜

あき秋のころ里子先泳むらんを皆よらいつれ月うま  
をさつせや峰の本枝よも吹くもそれ雪れ山の端  
ひふらふく旅のれ神もなむわらふのふれ雲月のこも

明日香井集

建保四年八月廿日

日影さび重れくその系麻ふくればそ小風そ清き  
藤白や山のたか守て秋風の吹上れ浪小はけふ月歌  
え清き枝の外ふらむらておのれくくくの枝を

湯浅氏の二口渡り一渡よりゆきくする  
異制定訓往来云

鎧中 鎧形 劔首 竹角 等 一向 違古 躰宗 當世 鎌召 寄紀 伊國 湯淺 乃 至  
洛陽 邊聞 候物 具細 共 有 核 調 至 為 立 隨 分 認 手 碎 心 所 結 搆 也  
湯淺 莊司 進 出 テ 申 ケル ハ 畧 威 毛 コ ソ 好 モ 候 ハ 子 共 我 等 が

石崎

石崎 石崎を湯侍の古名としていへばあつ湯浅中れ字なれ  
一本明徳傳云

元久元年二月十五日於紀州湯淺石崎 親類宗景 修涅槃會

湯淺氏故居

湯浅村浜治を町の小湯浅故  
を教とていふなりこれよや

手ツカラタメ持テ候物具ヲバ如何ナル筑紫八郎殿モ左  
右ナク裏カスル程ノ事ハヨモ候ハジ云云と云えくれ湯淺  
ゆきく事せしゆや但書色の本中湯浅と湯川とせり  
石崎 石崎を湯侍の古名としていへばあつ湯浅中れ字なれ  
一本明徳傳云  
元久元年二月十五日於紀州湯淺石崎 親類宗景 修涅槃會  
湯淺氏故居 湯浅村浜治を町の小湯浅故  
を教とていふなりこれよや  
湯淺氏ハ藤原とては次法原氏の内にてとるべしとて次世に  
地小成して武勇とて稱せられ藤原元子殿系とていふ人始て  
書小見たりといへども其後平治の乱に守りて名天下にゆき  
を以て其高きより守りて和次守りて藤原氏とて教十家なる  
る實に二年於中一族の連署六十人許の姓名を載せしめて  
その世より守りて藤原氏とて一源全に藤原氏とて一源  
一門系於八條通園とて能延とて藤原氏とて一源全に藤原氏  
とて西園とて系中れは十八ヶ年とて南小北を弘小藤と入る定評の

名のつとより...  
姓名雜史古文書...  
一二をあげて...

湯淺門  
系圖 大槻

宗重 湯淺推守  
宗景 太郎源胤

宗弘 弘太郎

宗良 太郎八右衛門

宗村 太郎八右衛門  
宗定 辰太

景元 九郎

宗直 三郎

宗有 三郎八右衛門  
宗治

朝弘 義弁

宗弁 景元舍弟

女子 宗有妻

宗武 八郎

盛高 二郎次男流

盛綱 十郎

盛平 太郎左衛門

盛安 太郎兵衛入道

宗方 六郎三男流

光重 太郎

成光 太郎

光政 冬次  
光家 大夫

貞重 刑部入道兼西

成重 太郎兵衛入道

重政 太郎兵衛入道

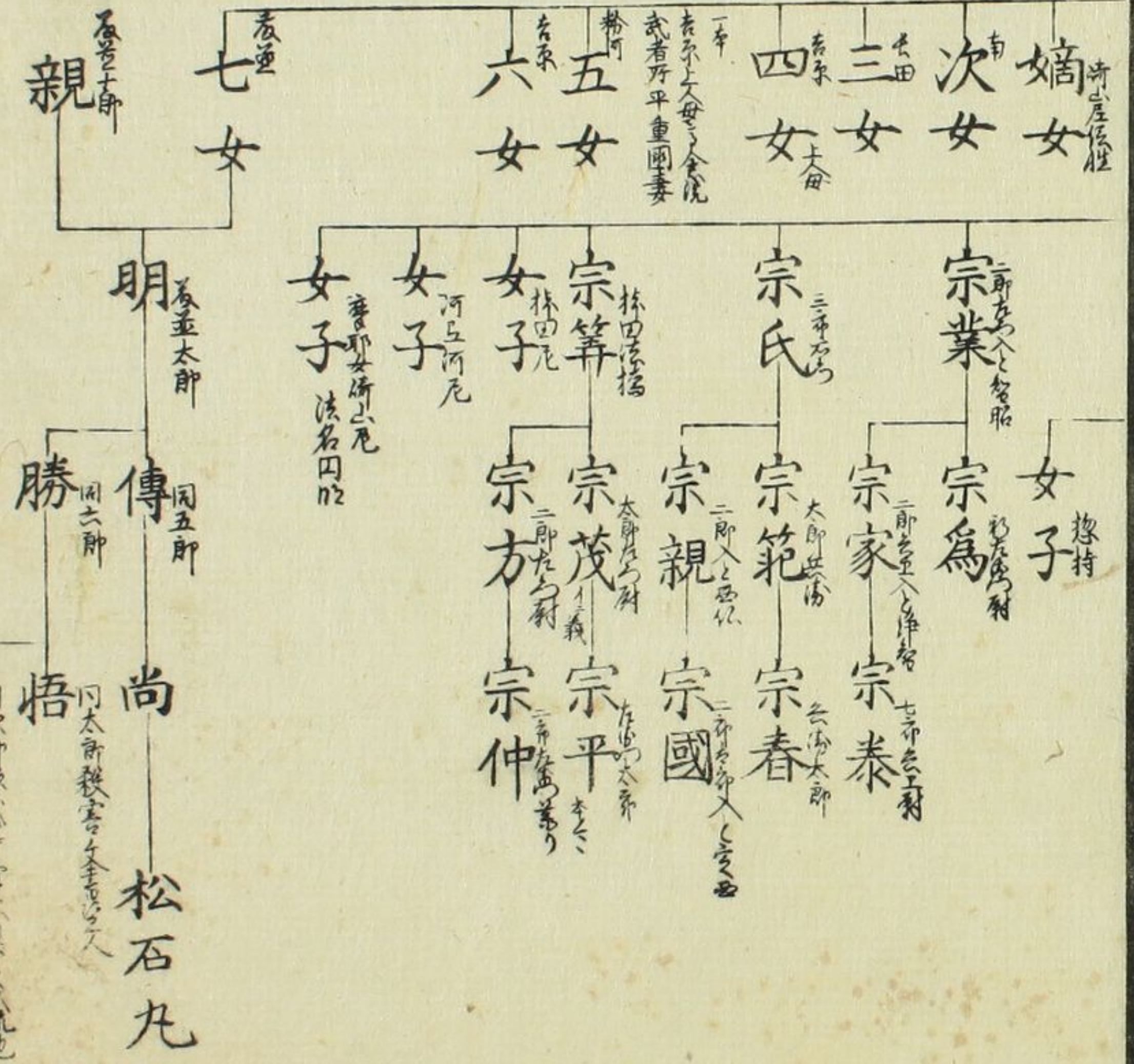
宗光 七郎兵衛男流

宗基 太郎左衛門

宗尚 右三郎太郎

宗明 又太郎左衛門

紀四編四十九



水崎入道  
 九つ子  
 あつが丸  
 もねの  
 ぶがれ  
 ほろろ  
 うりえ  
 ちんちん



湯浅宗永  
 喜美をそ  
 格河ち小  
 進せしと  
 八重橋  
 を山中  
 赤て足  
 出  
 ちんちん  
 とろろ



水崎入道

粉河寺縁起云 藤原宗永後載花木子孫繁昌事

宗永ハ紀伊國在田於湯淺の位人有り武勇れ家子生れ持權を以て  
次其子も當ち小堀依の心有りて兼和元年此妻の眞妹となり  
捕かゝり山中入る殊勝の八市橋を見出せり位宅小後一裁之  
重徳の心違はせり云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
の系又小多中下宿聖海の家云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
人小漸坐ぐわ傳云々云々粉河寺田小居位云々云々云々云々云々云々  
の突の方一疎之也云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
使去子不告死て其由を承ける小先づらて傳の方小強り云々の  
符合位心を増以宗永ハ出家して祝西に名けて一院を為小志て九千  
之より死ぬる子孫有りて今小繁昌せり云々云々云々云々云々云々云々  
平治物語平治元年十二月平清盛延那結連中洛中此屋とせて於へ  
久の條云去る程小十日此曉と波羅とる云々云々云々云々云々云々云々  
退行くり畧法也云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
子女を立男ハ去二十騎有る湯淺持守宗永二十騎有て此系ハ

これ百騎小ハ小あり

平家物語平治二ハ八月山口日合戦の條云大敗入り院宣を承り紀伊小  
何人湯淺持守宗永以下畿内のを者二千餘騎大荒く云々云々云々云々  
堂元を攻り畧源平盛衰紀の文同一云々云々云々云々云々云々云々  
同時の事と書して云湯淺持守宗永とて紀伊小武志有り云々  
く世七騎有る其時ハ云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
平家物語云去る程丹及侍長忠房ハ八幡の軍より降く云々云々云々  
おん云々云々紀伊小何人湯淺持守宗永と教へて湯淺の條小云々云々  
也あつてのあつてと云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
のゆゑ也云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
して云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
又ハ云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
との入るがうと云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
まづ云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
也あつての入るがうと云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
とひら云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

等山氏文書云

元慶元年二月十四日  
九日卯辰  
在御判 賴朝  
退申せりも云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

平家揚河赤永二年三月惟盛卿... 湯淺宿死五郎云男宿所事甚過差

明惠傳記曰建久九年畧石垣山奥人里三十町許隔テテ茂立ト云處アリ奥アル靈地ナリ上人ノ舅湯淺兵衛尉宗光

東鑑云兼元四年二月十日紀伊國安豆川庄地頭職者故右大將軍御時為高野大塔造營奉行賞賜高雄文學房訖御素

上覺 平家揚河赤永二年三月又日畧揚去湯正公ハ去子赤坂の城小孫六入道宣佛

孫六入道宣佛 平家揚河赤永二年三月又日畧揚去湯正公ハ去子赤坂の城小孫六入道宣佛

叔中不揚八人ともる由捕爪小少て兵を及の切あへさるるを奪取て... 幸宮太郎左衛門 平家揚河赤永二年三月又日畧揚去湯正公ハ去子赤坂の城小孫六入道宣佛

湯淺宿死 湯淺宿死 湯淺宿死 湯淺宿死 湯淺宿死

湯淺宿死 湯淺宿死 湯淺宿死 湯淺宿死 湯淺宿死

予之不堪感引所殘鹿毛馬了今日適休息終日偃卧



五月  
定家  
湯  
乃  
乃  
乃







江南竹枝  
 薰籠火老麝煙  
 乾柳外輕風吹  
 不寒深專寺畔人如  
 海滿院香雲并涅槃  
 垣内霞峰



白橙丸衛門肖像

孝宗悦

悦目也

花より上り院

心八法水保

剛志雄

剛度己

夫の深冲結

の岳道

慶長貳拾貳年申二

治東禅林仁果之



四四四四七六

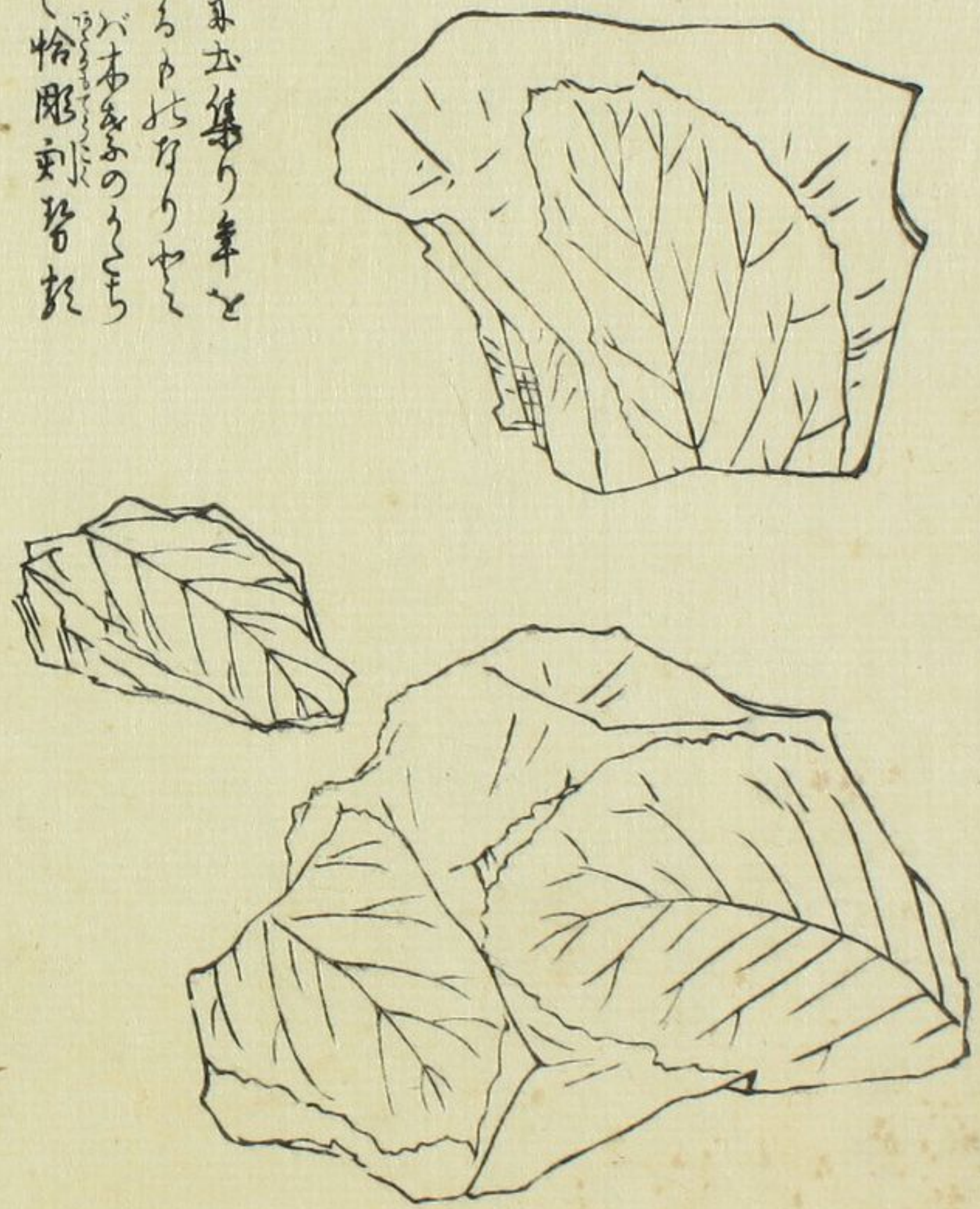
御幸記

十月九日 畧次又過今日御宿三四町許入小宅宿所自  
上雖有例假屋此家主依儲雜事入此所女儀云先是音男云  
又依文義從男取宿所先入小宅之間件宅有憚之由聞  
付之仍騷出入此所先達如此事不憚之由被林父喪七十日許云雖然臨時水  
ヲカキテ以景義令技了又依有所思取潮垢離力ク是  
臨時之事也此湯淺入江邊松原之勝形奇特也家長送  
題二首詠吟窮屈之間甚無術兼燭以後又著立為帽子  
如一夜參上小時被召入部内又依仰講師事了即退出

享保七年九月十一日湯淺村の宿所を小宅宿所と改め九月十二日  
入江の松原へ舟次大々々々つ畧十三日つとめては  
をいぬんしせし耐る他のみそりまゝいふと云ふ  
まはれはのりらんうらりいゝそりまゝ買うかゝみのおくれの法  
又三首のころをとりてふ

木葉石

本家地み落て上耳五集り年と  
地を石に化したるなりや  
いりこれを破き本家のうち  
まがれ交はりて恰彫刻等  
なり



おろしきもいふまじきもさるる草浪の入りおろしき薄層と似雲

本家石 同村小の傍小川の石壁

廣瀬園山満願寺 同小穴橋小の

傳へて 後白河院の勅願所小志光義上人の年表より

七堂伽藍二十六坊あり小天正の頃寺僧本念興山

上人豊を園小乞ひて奉堂へ小塚小碗(奉尊へ寺僧山二五

と能世那寺山引移せり今終小堂舎ありて今

院を引所山薬師院持楽寺といふ類慶の後淳七宗より今

持を保小正應二年法性寺末末在田寂寂樂寺とて今山と

河豆川庄を幸ひ冥東小併りり河に 寺名 所謂寂樂寺と

これものりりらん當寺より持楽寺の邊小堂塔の名二

十洋田地の字小持とて今畧

白方山持樂寺

同村小の海に京西山流あり然る處に院ありて別小山持樂寺  
院持樂寺といふ持樂寺とて今持樂寺

類聚一當りも又兼取以て及海に宗此僧其奥せり中書集抄

古にわたり付抄十八社大沙の條八幡行りるの西一町許小大つと今此地にあり

白方宿所 今宿所は伊勢系に於ては小島より小田に於て宿所なりと云ふ文にあり

一本明惠傳記 上人因崎山小居一此方れば皆く小載て後考をせしむ

兼元四年四月民部卿長房卿熊野詣下向之時於白方

宿所上人對面之次花嚴金師子章注釋重有懇望之趣

久米濟王子社 別小村の南古より一町許東小所と云ふ復修造の後又

十日自夜雨降遲明休朝陽漸晴晝天猶陰拂曉凌雨赴

道無程王子御坐 云但依路遠向路頭樹拜云云云云

然聖道王子社寺破壞奉依法有願可被修造也日時勘文是

之其内紀伊國湯淺庄久米崎王子社破壞無餘云然者為地領之

便如孝丁寧可被造營之狀依仰執達如件

嘉禎二年七月廿四日

武藏守前  
修理權左史前

湯淺太郎殿

湯淺城蹟 同村の東山に小いなり是並所是村小所なり

花營三代記云

永和元年九月廿五日紀伊國所楯籠之宮方没落之間翌日

守護人已下攻入在田郡 湯淺 之間所々宮方城没落云 十

一月五日夜紀伊國大將細川兵部大輔使者到来去二日凶

徒打取之間合戰大將引籠移云

殘櫻記云

文安元年八月 義有王 管領島山持圍入道紀伊の國人等小

下知して八幡城を攻めせり其時小島有利を失ひ

南方諸小島より攻めしむるに細川出羽を差向

て研々攻めしむるに其城を奪て移す

同小湯淺城あがして籠りて居ひ多し 中同二年 同三丙子年

九月島山かの邊が衆人抱仇を命あてて守城に入

浮網を差きしり攻めしむるに城がて籠りて居る

切ら出されば衆人大小討死され守城を捨河も小楯

籠りしぬ



靈巖寺  
古跡

山門々  
ツノのつとも  
夏末迄  
一炉巻  
凡番

慶雲巖寺址 名傳村を去れる東一里味の山中ありて北に古の穴流と  
人の書多しと云

穴地藏 山田より北に開けたるは其地を去るにありて古の穴流と云  
名傳村を去れる東一里味の山中ありて北に古の穴流と云

廣野 廣野の南ありて十たけ村を去るにありて古の穴流と云  
名傳村を去れる東一里味の山中ありて北に古の穴流と云

廣川 二村の間を流るる海小入る海口ありて古の穴流と云  
名傳村を去れる東一里味の山中ありて北に古の穴流と云

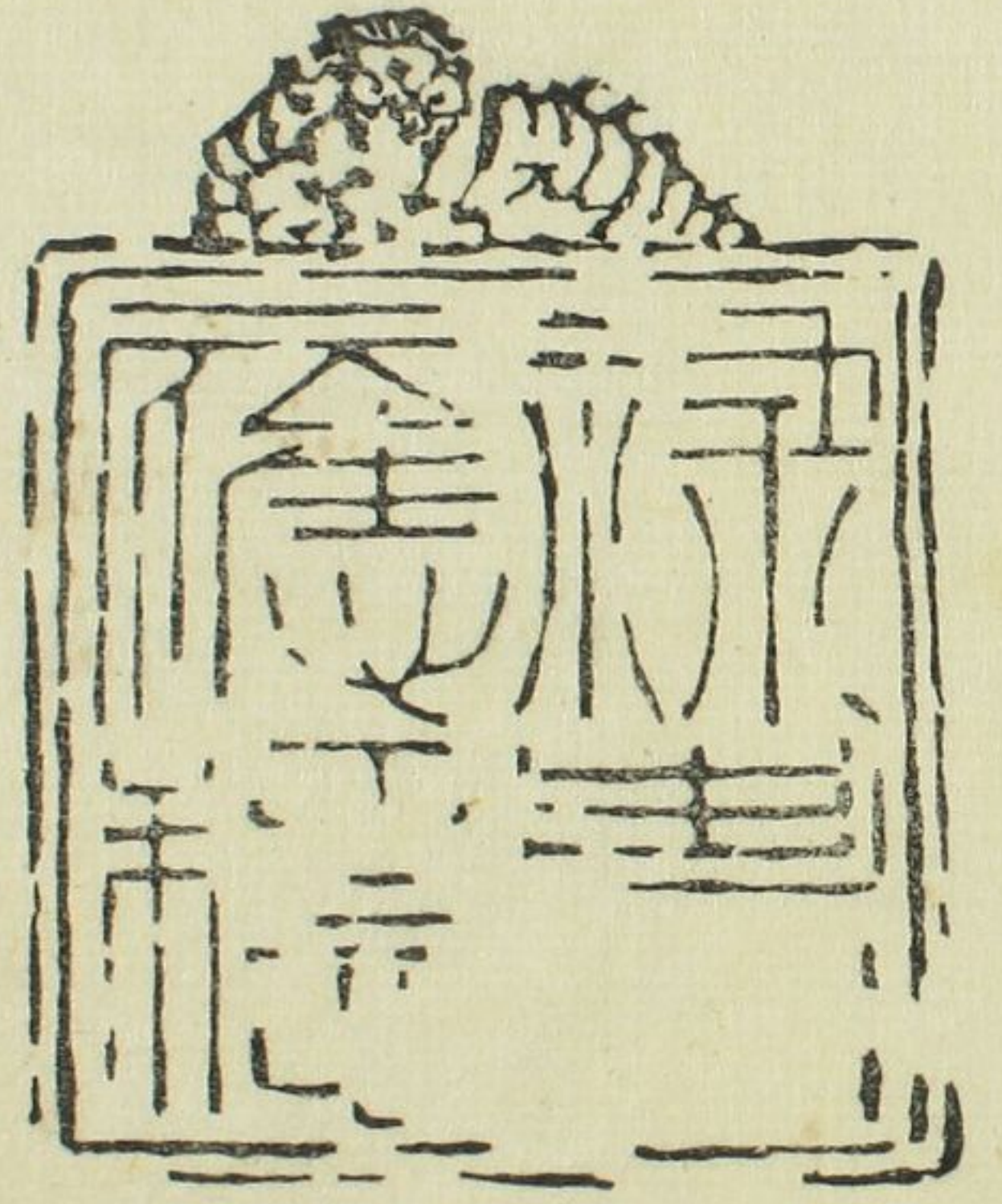
○廣橋 廣川の村を去るにありて古の穴流と云  
名傳村を去れる東一里味の山中ありて北に古の穴流と云

長立山源寺 廣村の北端ありて法華宗より古き此大天々大藏師  
年許以て祀奉するに始りて其地を去るにありて古の穴流と云  
名傳村を去れる東一里味の山中ありて北に古の穴流と云

紀四編四三十一

虎印判

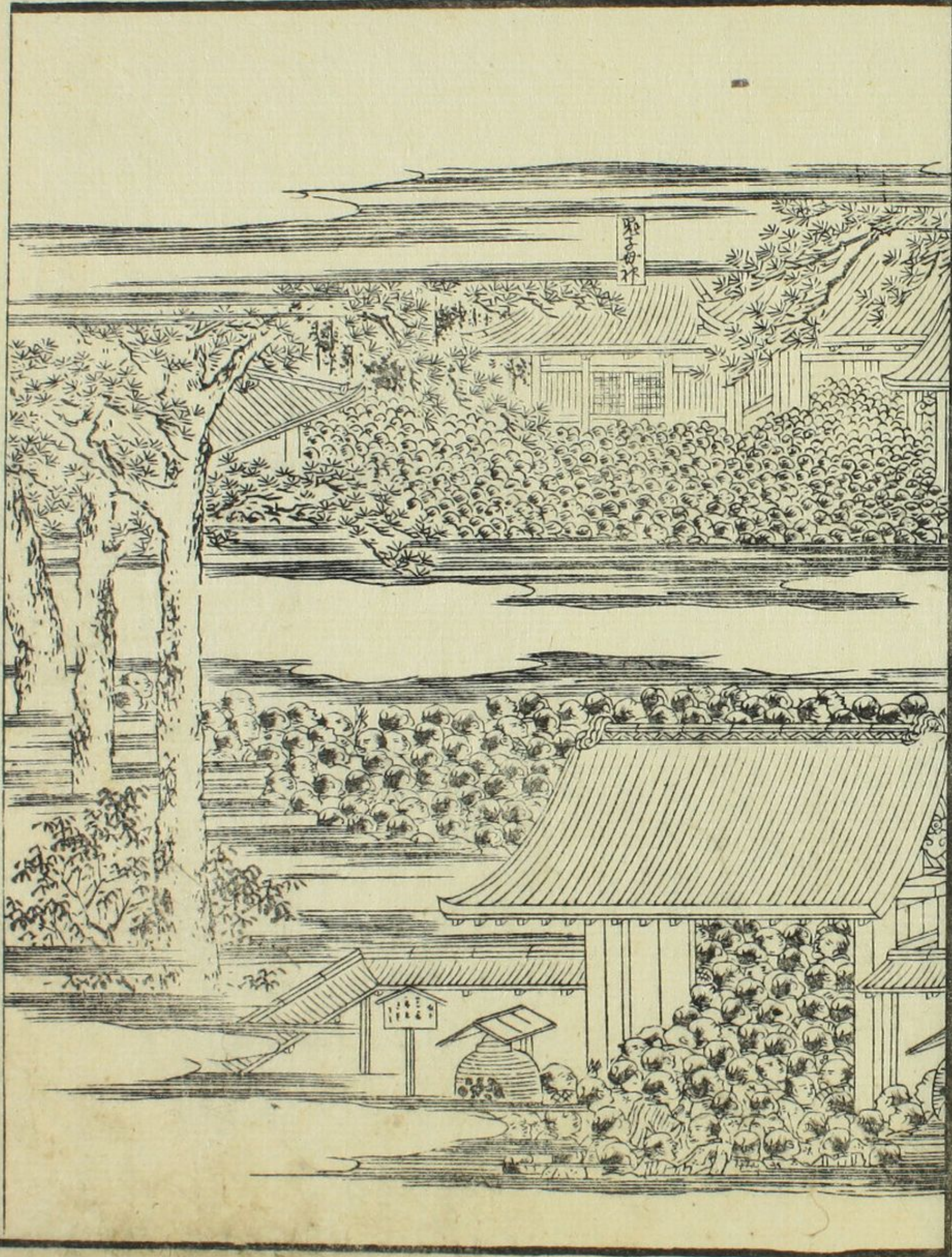
を以て法華宗より古き此大天々大藏師  
年許以て祀奉するに始りて其地を去るにありて古の穴流と云  
名傳村を去れる東一里味の山中ありて北に古の穴流と云



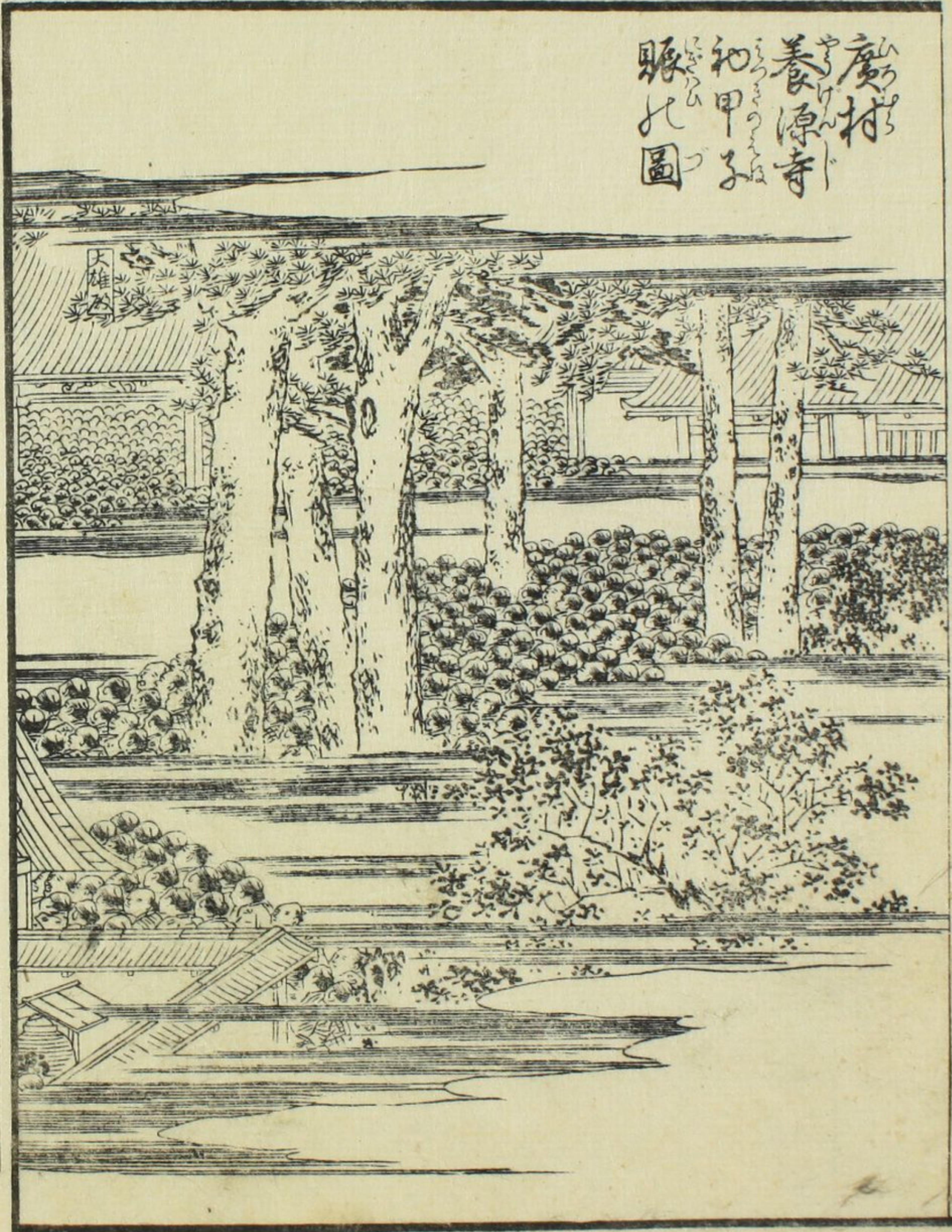
天國

同村湯川を去るにありて古の穴流と云  
名傳村を去れる東一里味の山中ありて北に古の穴流と云



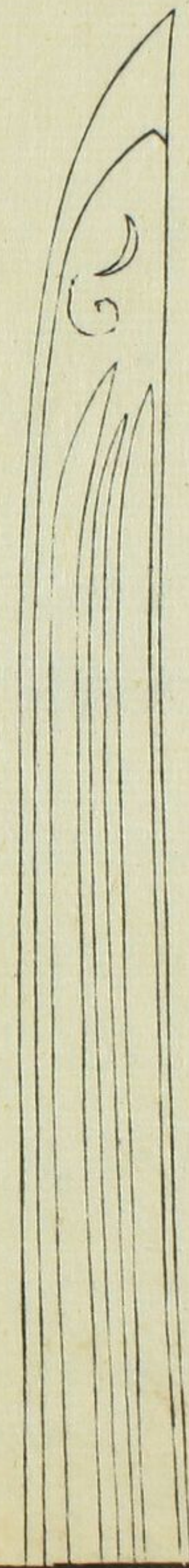


廣村  
養源寺  
和甲子  
縣北圖



天國劔

長サ 壹天七寸八分



八幡宮

中野村小町の庄中七ヶ村の庄主神  
白り交日八月十八日了迄及四糸り

寛文記小當社々

次明天皇此沖宇此創建小一ヶ古の廣

名三分一を以て社領と次又云は神籬々前田村莊中の小徳

世せれを龜永の頂以地の古豪梅本覺と云つゝ者り其

願せし地を社地と云つて社を造り今相殿の御子其れと云

つゝ其の地今相殿の御子周々前田社を奉山八幡宮といひ傳ふ又

衣宗此八幡宮と記述せりともいふ然るに奉山今相殿の御子小町なるハ衣

宗より此記述せり此地の社を奉山より遷り今相殿の御子其れ子

抄記す今相殿の御子其れ其の他無二永正十三年天文十年同日十二も永祿

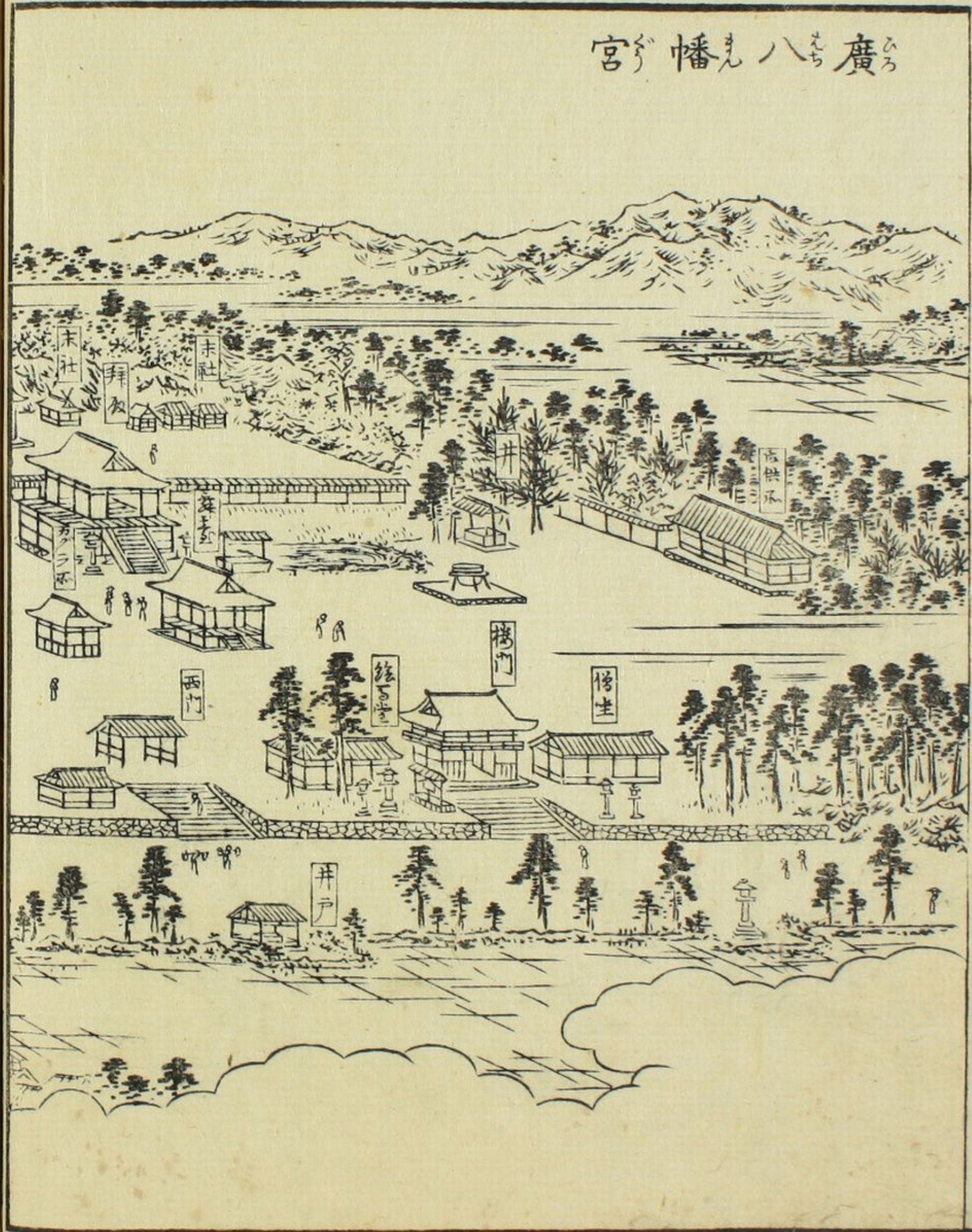
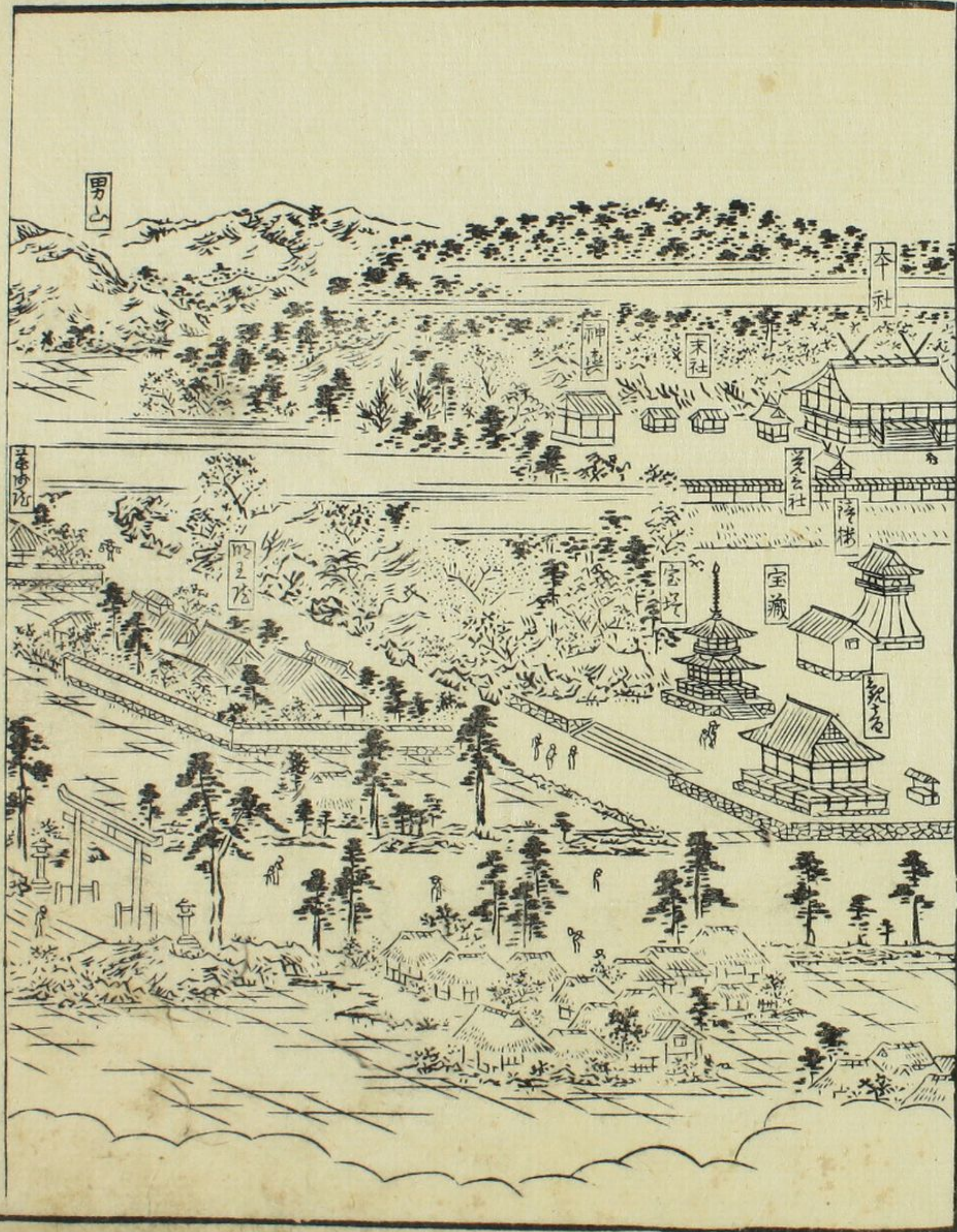
元龜文祿等の棟札りて棟札の文子よ此小天文の事りて此地の記述るや乃

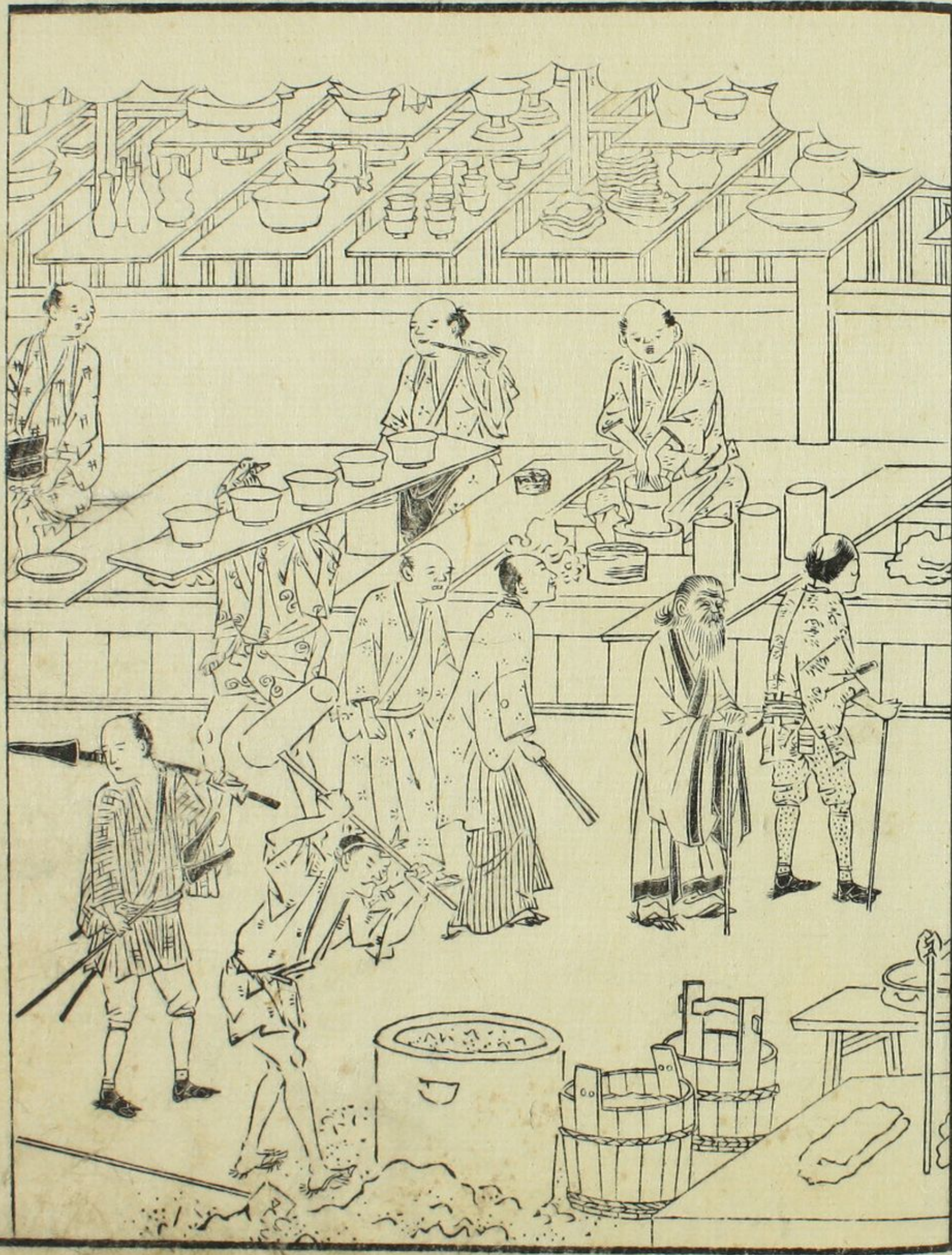
沖原なる一も天文の記より海川氏此地を依りて始り此處をを記すその後

比永氏を社領す一津守氏を公文と一牛井氏を公位と一今相殿の御子社寶舊記文

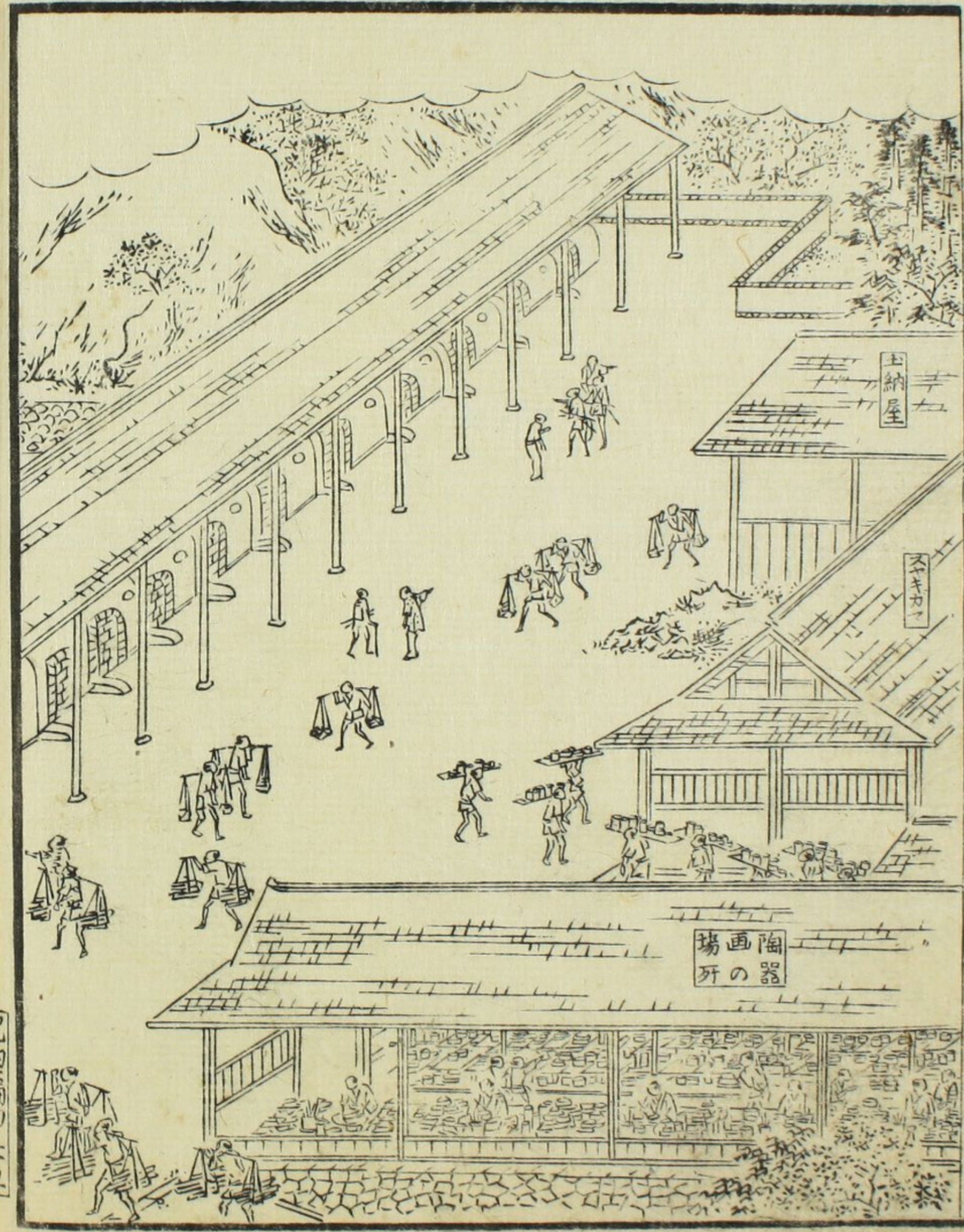
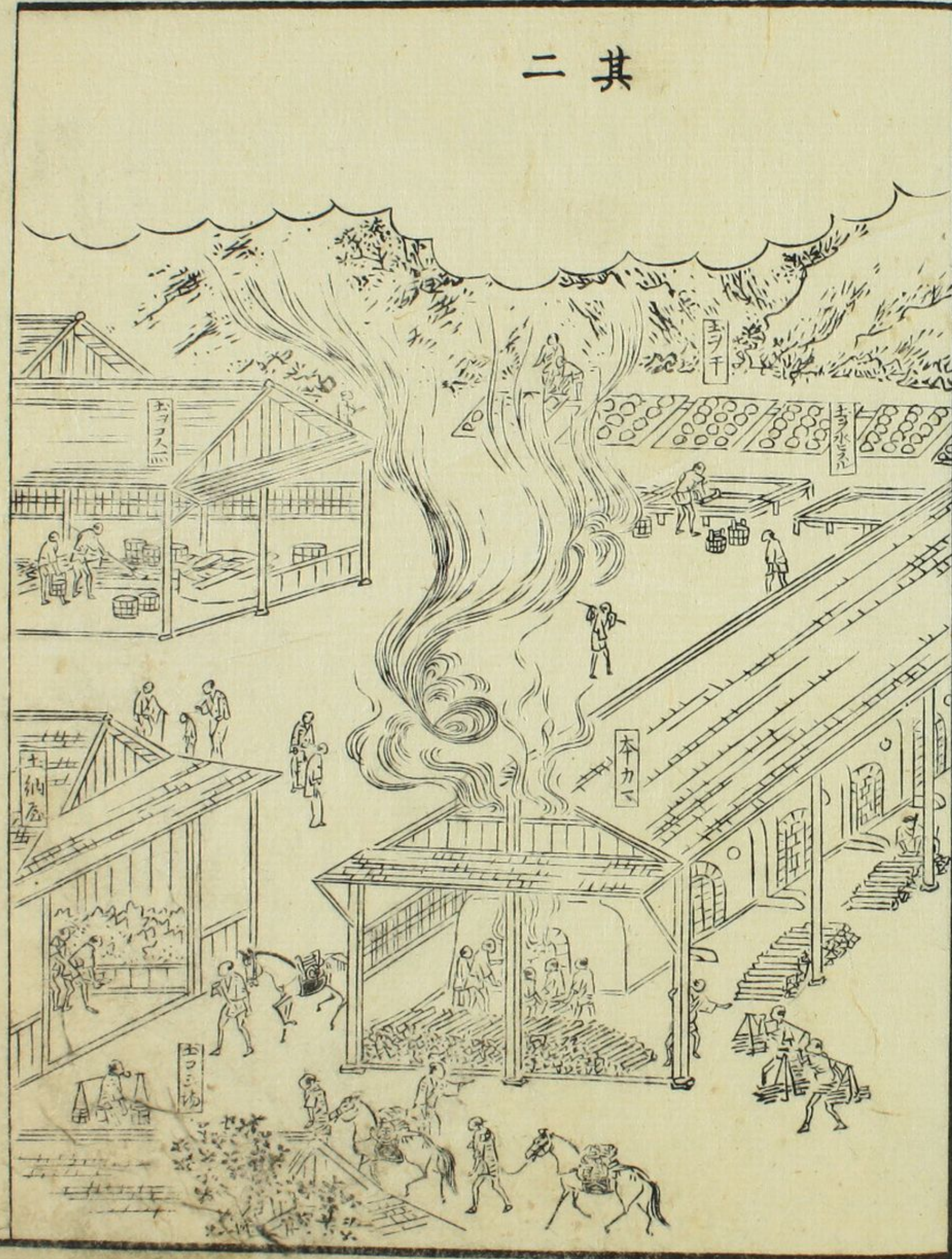
書此記天文十二年孝昌氏勲伐の時變小罹りてみる

灰燼一社領も亦没収せり今相殿の御子長六年淺野氏社从





其二





敬白

天満宮印

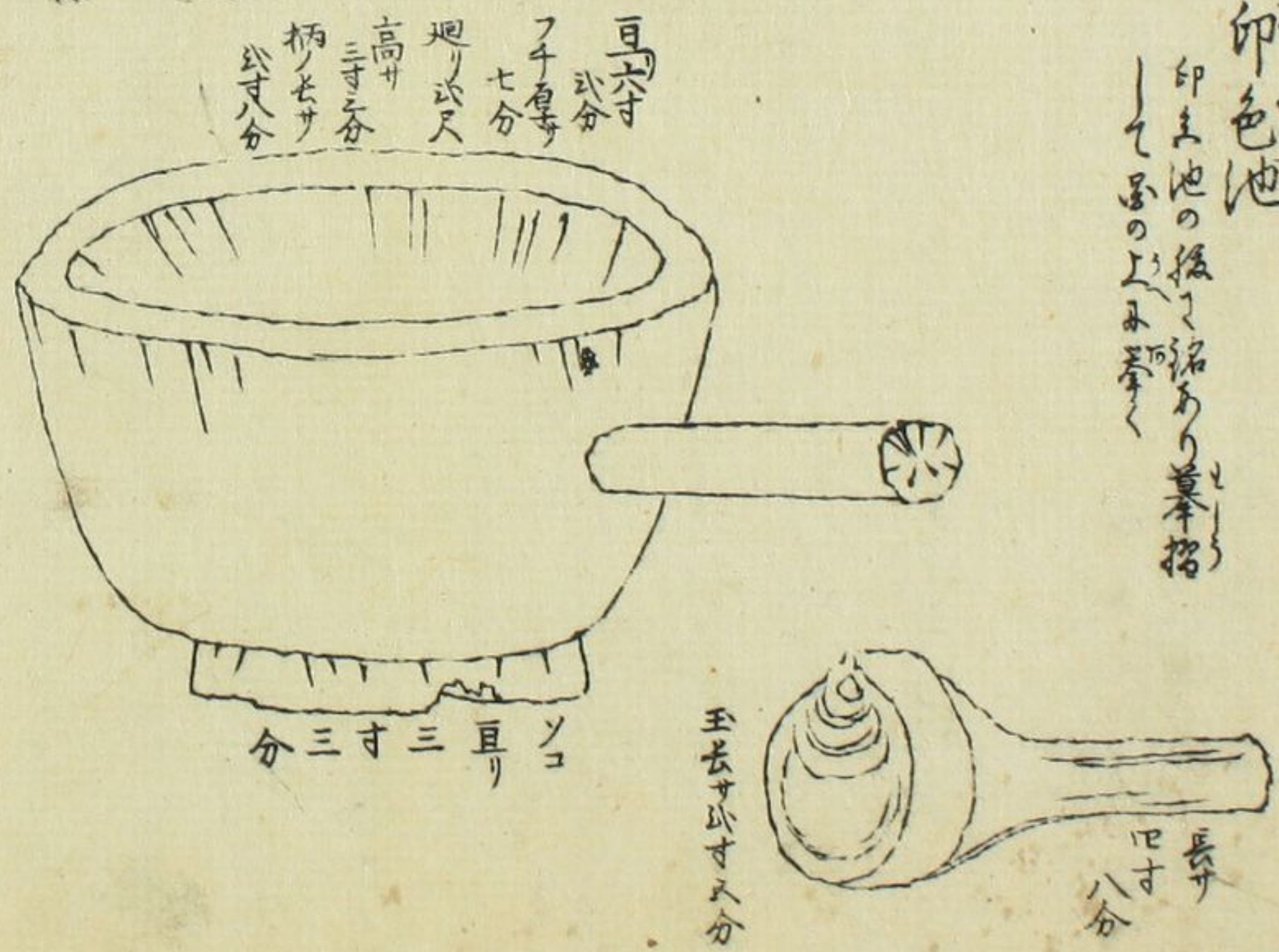
室前寺通

應永八年

二月一日

敬白

音田山天神社藏神符印  
吾印色池  
印土池の板に沼あり葦摺  
しつゝのよみ奉る



池邊山法藏寺

同村小川

永享の頃以地小津守淨道梅本是言とつ二人の古豪河  
了て惣持寺此天祖の和尚小津依以後和尚幸山の法  
開けれを然して尚於小津ありつ二人の古豪家地及山林  
為年を去り附とつ  
坊今皆廢法以又赤寺二十又寺の  
古千株ありやん以迎の大寺あり  
明應十年天文十二年以之此寄  
附伏字のり慶長十二年法皇氏寺領七石を去せつれ元  
和の儀も統用せつる園中小敷つれのもみらとつ木の天  
樹りつ元和の頃 園君所遊覽のよをわひ傳ふまも  
そ本儀多の大風小倒れつとつ

天神社の神符印と印色池とを裁む共小本ありて古色り林とて田とつ  
立神 西なるふ小浦小川ありて小川の神とつ  
を去りて心多く果をむとつ

貝化石 西廣村の山小石に塔の化石多く見ゆ  
鷹鳴 西廣村の北より二十入町小石に塔の化石多く見ゆ

紅葉集  
家山の中流小憩し人々の飛つてうたの響きあり 高舟上人

○後城址 紀伊國大野郡大野城の跡  
應永六年島山基國が臣當國を以て名を改め大野城と築き遊流を後守入る同氏部を守護代と次其後城を築て本城と次 後守入る同氏部を守護代と次其後城を築て本城と次  
其れ婦男尚順入道山崎應永年中より天文年中まで城あり次天文三年湯川直光其氣を蒙りてと恨みて南紀の浪士をうきし火をかくト山崎直光とて後守入る同氏部を守護代と次其後城を築て本城と次 後守入る同氏部を守護代と次其後城を築て本城と次  
浦光の寺小舟とて

○雁頭山能仁寺 名湯村小石に塔あり寺傳小石 後村上天皇の御願

○井關王子社 井關村北の入口小石に塔あり

○井關驛 湯城より一里

井關阻雨 數見知豫

離家繞數日便抱決旬情山林秋客老村烟暮色橫

○井關川 井關村北の川  
吏事青山遠病中白髮驚雖非異郷客幾度計歸程

○川瀬王子洞 川瀬村の川瀬王子の文上小川にあり

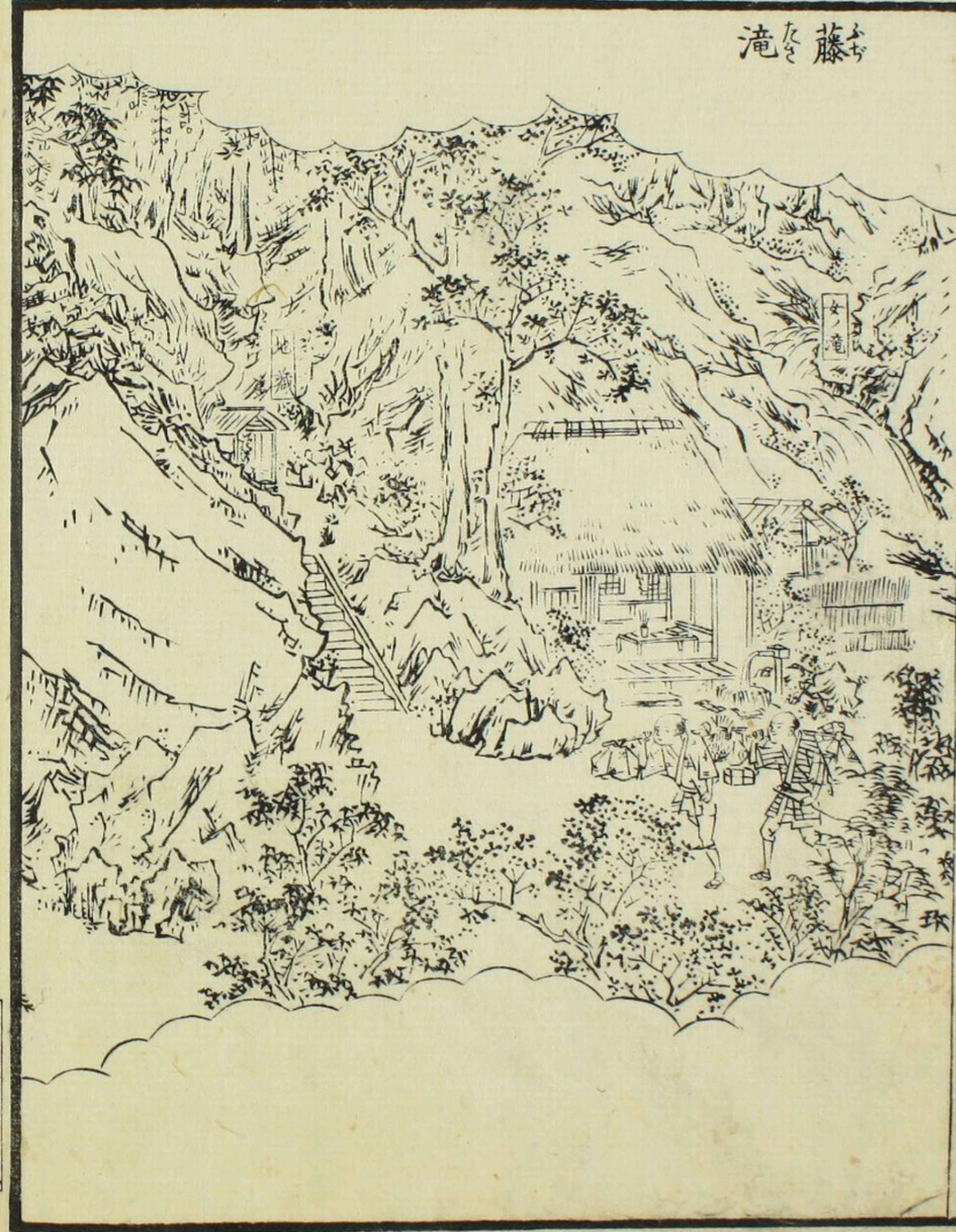
○馬留王子洞 馬留村の馬留王子の文上小川にあり

或は此社を馬留王子と云ふ





山祖  
その  
水  
世  
く  
く



滝藤

○津本坂 川瀬坊の地をよきもの方津本坂へ城を築る坂有り津本坂ハ二村あり  
風俗もたの川

上草漣 中村の河の巖よりつらつらと流るる

孫漣 日村の河より流るる乃の傍にあり壯観なり飛鳥乃上孫漣多き故に  
名と以候小迫本小堂を建たて又及家と道小傳へり

松廬遺稿

紫鐵如飛巖勢橫瀑光觸石濕雲生只看百尺寒冰立中

有奔雷劈岳聲

日暮秋溪聲益雄急湍啄石捲回風板橋與水纏三尺人

過珠跳玉碎中

允賀八幡宮

中村の河より流るる乃の傍にあり壯観なり飛鳥乃上孫漣多き故に  
名と以候小迫本小堂を建たて又及家と道小傳へり

岩瀨

中村の河より流るる乃の傍にあり壯観なり飛鳥乃上孫漣多き故に  
名と以候小迫本小堂を建たて又及家と道小傳へり

記四編

觀音堂

鹿瀬莊司

中村の河より流るる乃の傍にあり壯観なり飛鳥乃上孫漣多き故に  
名と以候小迫本小堂を建たて又及家と道小傳へり

上人作の垂垂岩と源起の宮一をを記す

○藤瀬山

十日畧次又攀昇シ、ノセノ 山雀崑嶮岨巖石異昨日

庵主 ちこれにせむる板敷の鳴をきく

増基法師

南海集

昨夜雨蓬沿海煙峰迴路轉上青天江山不許還家夢

才過波濤又石泉

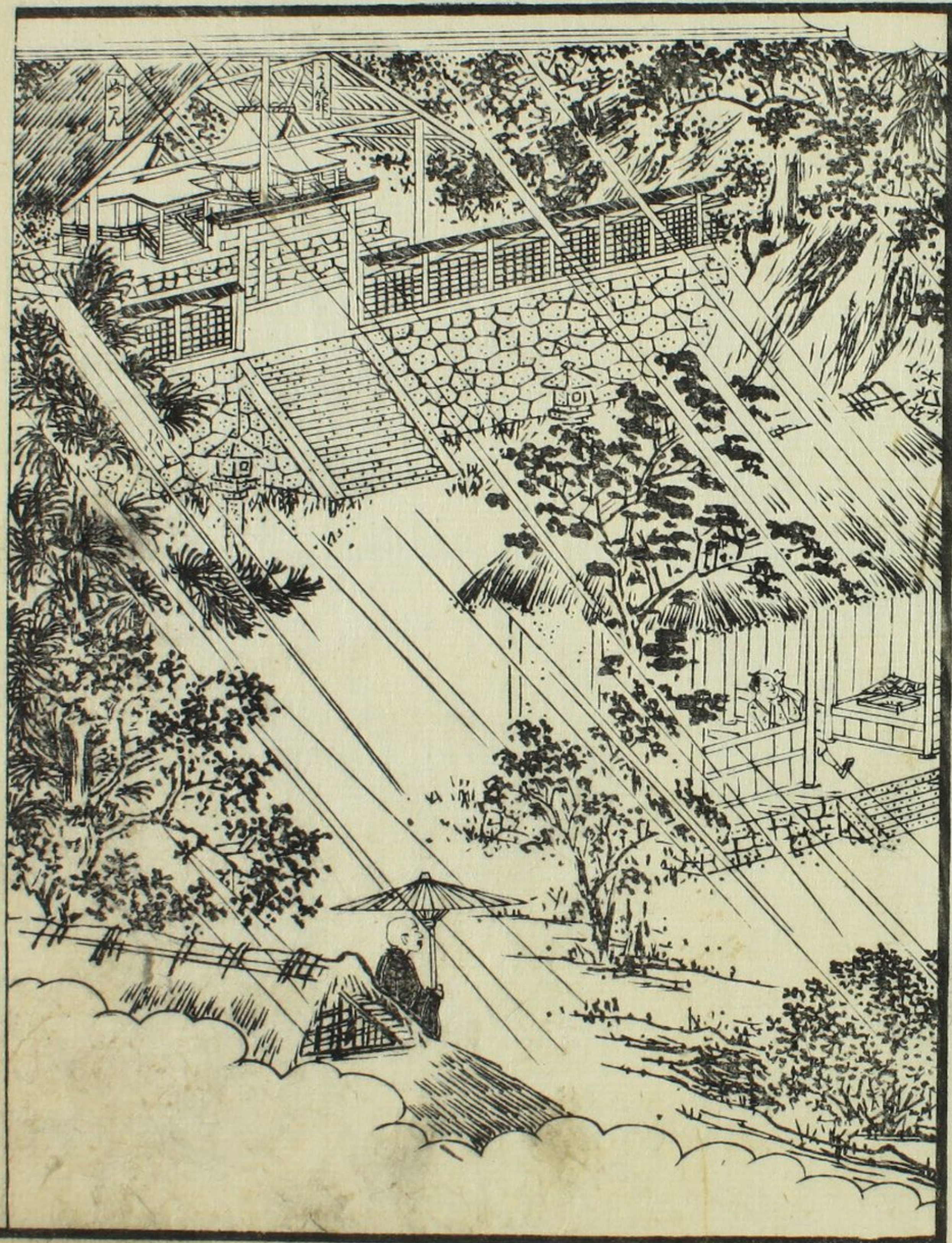
夢入梅花憶舊遊吟裝更逐冷雲流春風可笑客衣敝

孤劍又過鹿背岡

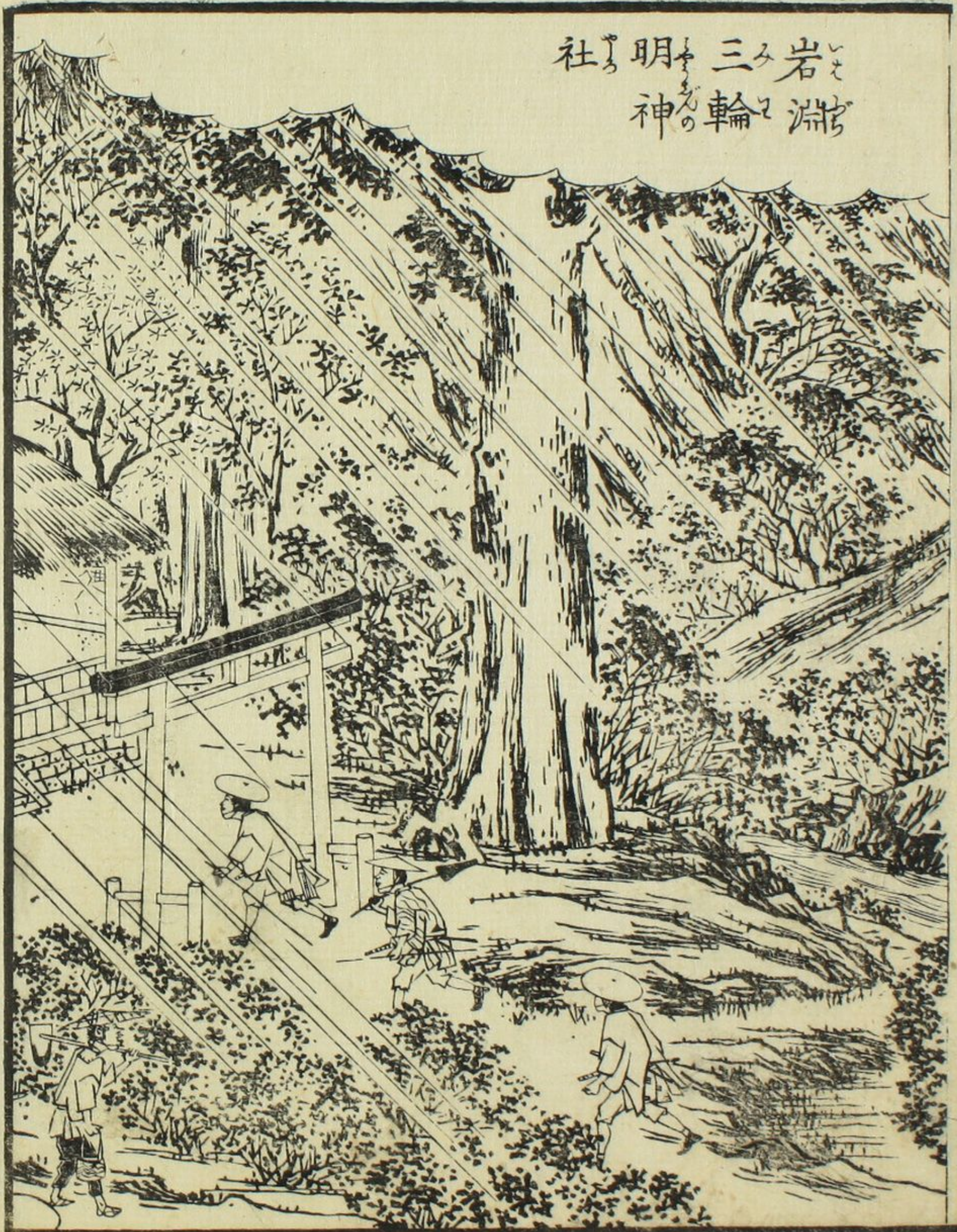
松廬遺稿

野呂隆訓

祇園源瑜



岩三々明社  
淵輪の神





○井関山 あせとのやま 飛騨山の

新編古今集 あせとのやま

道命法師

今按名蹟考不似人然其人多い人けりばその時よ  
かむけりしんしつひ

夫木抄

あせとのやま

天の河井関山はそねふるまはれしあいの観きさうひ 光俊朝臣

初句を河内天河とて河内ひがめまゝあせとのやまを夫木抄  
河内とまはれどもこころ天との河内まゝ井関ハ即命

よめると同なる

○鹿背城蹟 あざむけのしろ

治養四年九月三日略傳聞熊野權別當湛増謀叛略人家數  
千守鹿瀬以南併掠領了 玉海

玉海

同五年九月廿八日略傳聞熊野法師源一同反了切塞鹿背

山云 倭小孫野別當次男

云條不又々々々

○法華壇 ほつぽうだん

毎夜作の良一町殊ふりり下文字倭小孫今  
如くより法華壇法華壇

釋圓善遊熊野肉脊山卒其後有沙門壹睿者行宿山中中夜

聞誦法華其聲微妙睿以為先亦有人宿一卷已禮拜懺悔又

讀一卷每卷如是天明無人傍有骸骨支躰全連青苔遍鎖似

衣服想久經歲月觸髑口中有舌如紅蓮睿見之感怪欲視所

由次日不去入夜誦經如昨至曉睿起拜曰既誦經必有心語

願聽本事以傳靈感睿人荅曰我是台嶺東塔院某也至此而

死生平起堅誓誦法華六萬部存日纔半數而矢願力不接住

此尚誦經耳今已始終居此不久去此當生兜率內院睿聞了

禮骨人而去翌年又來不見苔骨

○海部 あまのうら

立田日言あだのる小孫申れ衣衣由長二毛小なる海部の地

○衣奈莊 えなのぢや

衣奈小引の三村湯渡の海部小引して矢枝度備等と云不附せり立田部

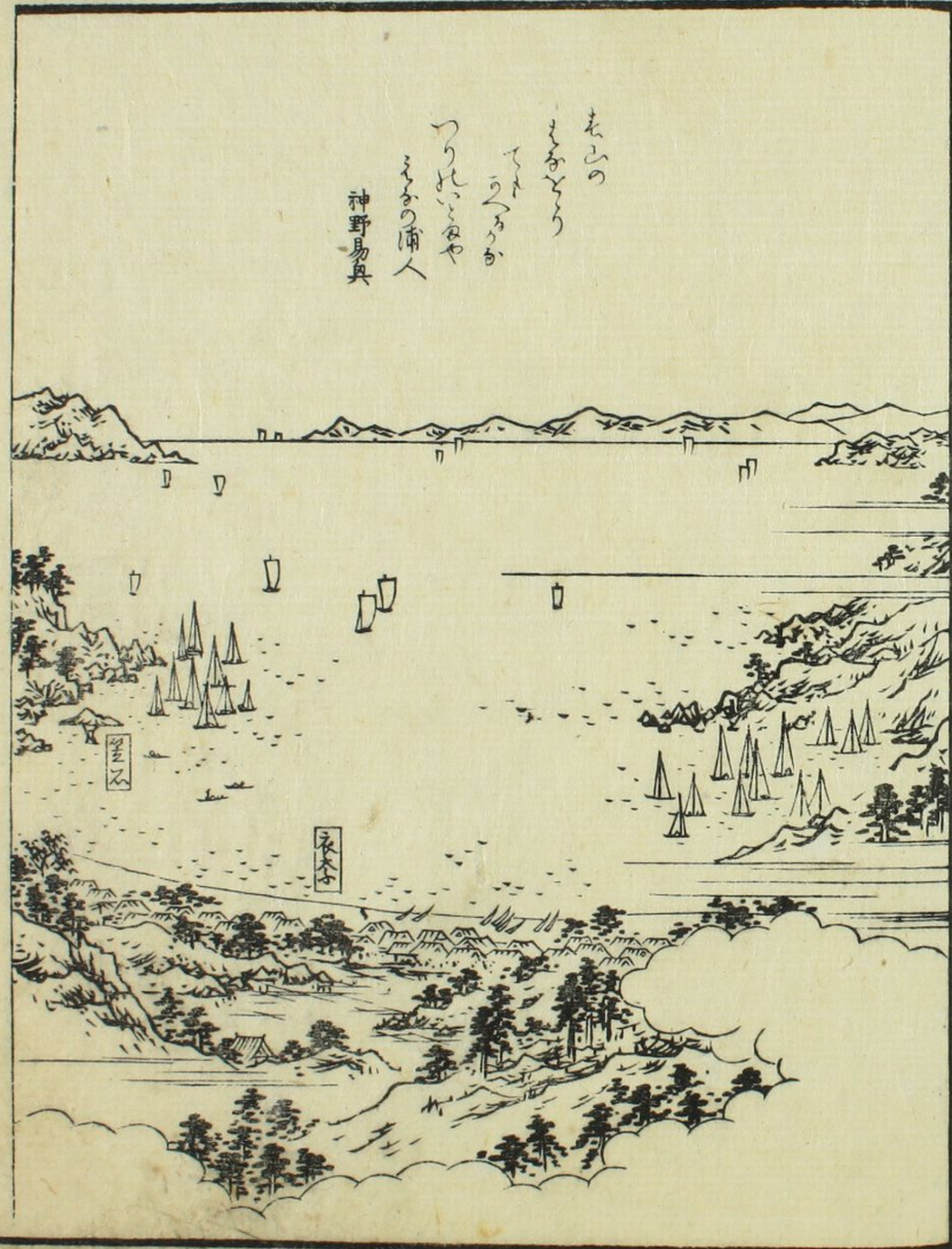


通カト  
 つかれ  
 うらみ  
 よせて  
 よめた  
 一々  
 いちぢ  
 又  
 拾栗山人

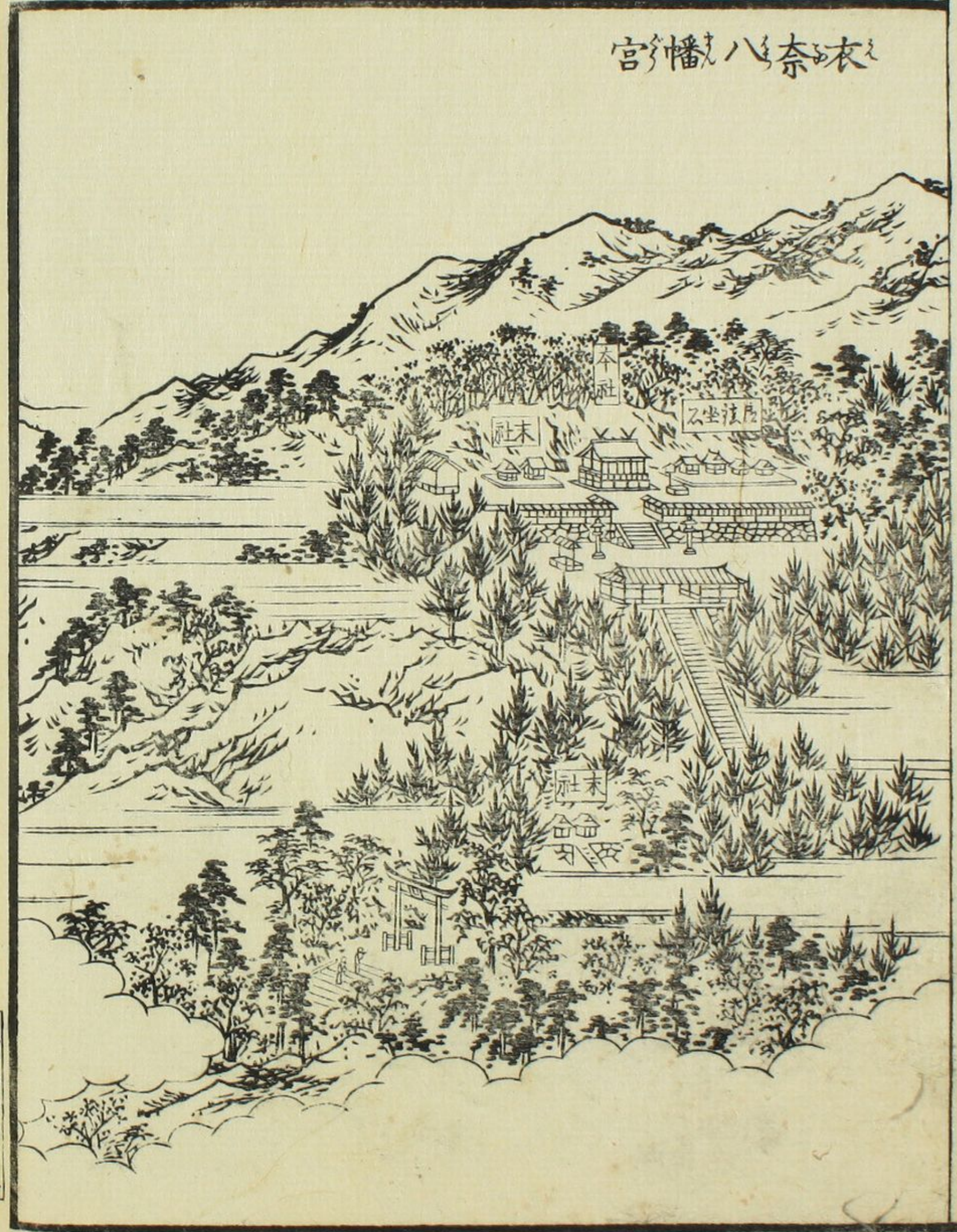


えみ  
 うら  
 やり  
 うら  
 衣奈浦蓬萊の圖

表山の  
 もろとろり  
 てん  
 うららかに  
 つれいそや  
 ゑまの浦人  
 神野易兵



衣奈八幡宮



三尾川村中丁四丁條

由良坂 三尾川村中丁四丁條より

鐘林寺 三尾川村中

蓬萊 日村の海上にあり小島あり其の形宛と齋宮小山を覆へるが如し近

杖堂と云

奈奈八幡宮 奈奈浦小町と云

本社 方三間

末社 若宮八幡宮

武内社

佐吉社

天満宮

毎代又社

長床

御供所

神輿舎

境内山林

東西三丁南

日本紀

神功皇后紀云命武内宿禰懷皇子横出南海泊於紀伊水門

略 皇后南詣紀伊國會太子於日高

古老傳云 應神天皇此御社當於大引浦小恙一丈より

上陸一多ひて此地小引を建て志を〜

四編四十六

出人尊ひてこれ此小神宮を造り後五八幡宮と云

崇事此中より又中古此縁起中々奈奈八幡宮より

流傳〜多〜男山小遷ら勢多〜十六と云

貞觀二年三月御殿の柱立奈奈此あり建曆二年九月

廿七日改造せり其礎石の外小一の端石あり此地も

らせ給ひ〜耐あせりひら石なり〜

むり〜大二本浦小〜

〜丹子登り〜

志守小登り〜の姓を賜ひて子孫と〜

〜の〜

〜の〜

〜の〜

〜の〜

〜の〜

〜の〜

〜の〜

〜の〜

〜の〜



一々大御名を廣幡八幡唐白りと神託一々入ると  
たむしは佛甚佛經轉國とあり 皇國小傳奉一々此神  
小を多けりあり 天宮此意頼ふよりてかゝる教を傳  
へてはこれ統字附きて遂小佛及法儀の大神と  
稱し天平廿年東大寺此法守小知信一々天宮の初  
更小上云云て後小皇靈威力神也大菩薩と稱し  
なれふりしとされるも是亦此法儀なり 時小中にて  
漫小のひ出これ例の儀統の安延りたれと是より  
是小八幡大菩薩ともい稱すを起りて然れども上古より  
大事河れば中門の儀文小を稱し中を新額あり  
よべて或るもを字りて神ありとては統のそと致大  
うとてさるり史典小存り中右源氏家於此神  
号と字と志て武勇地小稱し一々源氏の士殊小

これ神を信を鎌倉以降小至りて天下に貴神一般と  
崇りて今日小至りて小法小此守護地取或と  
社小配祀一或と新小社殿を造りて大小の宮社  
り充満せり當社と正一々無仁天宮此宮あり  
後其孰法の社地とて其多れども乱世と傳へる武  
尊も廢れと多り多り故一々更小構むと多り

### 八幡宮緣起一箇

也云々云々 院の頂以縁起甚速のり 皇命而てこれ名宗法團小権あり  
因縁ありある一々あるれども大菩薩のそ速宿於と十條御所の原記小  
くも小皇承慶殿の秋前妙光重鏡和尙御略小位稱し多りて此地近  
境なり小よりて於後又和尙の者命をかてて其法再と小あり  
子神意小眞合せり一の奇瑞ありて一々多きく尊を法むと一々  
とありて此堂小ありて此れ此小聖年辛巳七月廿七日辰時 皇の  
何や何とて此堂小ありて此れ此小ありて此れ此小ありて此れ此小あり  
る一々心これありて一々此れ此小ありて此れ此小ありて此れ此小あり  
とありて此れ此小ありて一々此れ此小ありて一々此れ此小ありて一々  
一々此れ此小ありて一々此れ此小ありて一々此れ此小ありて一々此れ  
此れ此小ありて一々此れ此小ありて一々此れ此小ありて一々此れ此  
法也云々云々 一々者命而て去よりて服疾りて一々此れ此小ありて

黒島

鳩の東南ふ方

と給呀とて

一大洞窟を

ひく能小舟

を寄る

其涼

大化

三

平

何

洞

の

六  
七  
尺



計の大

肅然と

ろく人

の長

揮

立

杖

を

を

は

ち

今

の

世

米

石

を

石

を

石

を

石



平威をもちんことおそくふとつて守る事なすまへて見せり

をたしぬ于時永九年純集壬午季夏耕雲野納納純拜書  
周子云於純右大臣長親公の法号ありては本年ふゆもをりくあり  
多るるやや奥國寺の傳家の孫起及立田於重貴公の孫起をもちて  
ふゆり此ふ二書とも自守りては法にまはせりては  
公の傳ハ大日本史ふも書くも是れは是等の事ハあり  
縁起表紙云於唐二年七月七日有君命而尋華國神社之舊記也  
及于初卷故其久而朽滅故結補之者也紀州日高郡衣衣八幡宮  
縁起表紙補破  
之書一函每

尾崎 衣衣浦より十丁條の海中にありてを田於乃會を射せり周廻  
二十丁づりありて樹木皆茂せり時長傳記小野藤治より南ふ久礼  
傳よりとつるは此傳を括ては有り久礼久呂をせん

佛石 此石小野傳の南面小野家ありて是れ舟の遺文のこゝありて舟人の  
ふらん此石の西ふり杉も小野傳のこゝありて是れ舟の遺文のこゝありて舟人の  
色に平瀬小野を流して

戸津井 此浦より西南南尾山を流して小野小野浦より小野浦より流して  
色に平瀬小野を流して  
色に平瀬小野を流して

小引浦 戸津井と磯山を流して海灣小引あり  
白崎 大引浦小野を流して海上  
色に平瀬小野を流して

白崎 色に平瀬小野を流して海上  
色に平瀬小野を流して  
色に平瀬小野を流して

紀州編四甲九

二十丈ふも何もつてさきく海をさきく  
わさくれくれの中ふも是長大臣の魂神ふされん  
浪の子里もさきくさきく大雲のむらゝ人の又さき  
つるむとさきくさきくさきくさきくさきくさきく  
ふれんむさきくさきくさきくさきくさきくさきく  
後むむさきくさきくさきくさきくさきくさきく

大寶元年辛丑冬十月太上天皇大行

石葉集 天皇幸紀伊國時歌 白崎者幸在待大船爾真撰繁貫又將歸見

汎舟游白崎

野日隆訓  
白崎萬葉集既有什其名舊矣在日高西界山足入海  
可三四里巨巖競擡攢立累疊奇態萬狀下有石壑中  
敷千席其深叵測時有鈴聲而似巫奏故土人名以巫

松廬遺稿



戸津井  
計九島

戸津井浦の海面は聳然  
として宛研山の越を具ふ  
る者これを十九島といふ  
と東南地方は接し其  
間断相挾めて縋ふ一溝  
隔る小似一躍せば踰ぐ  
おのれされども満潮の時ハ  
通船状くくと往来す





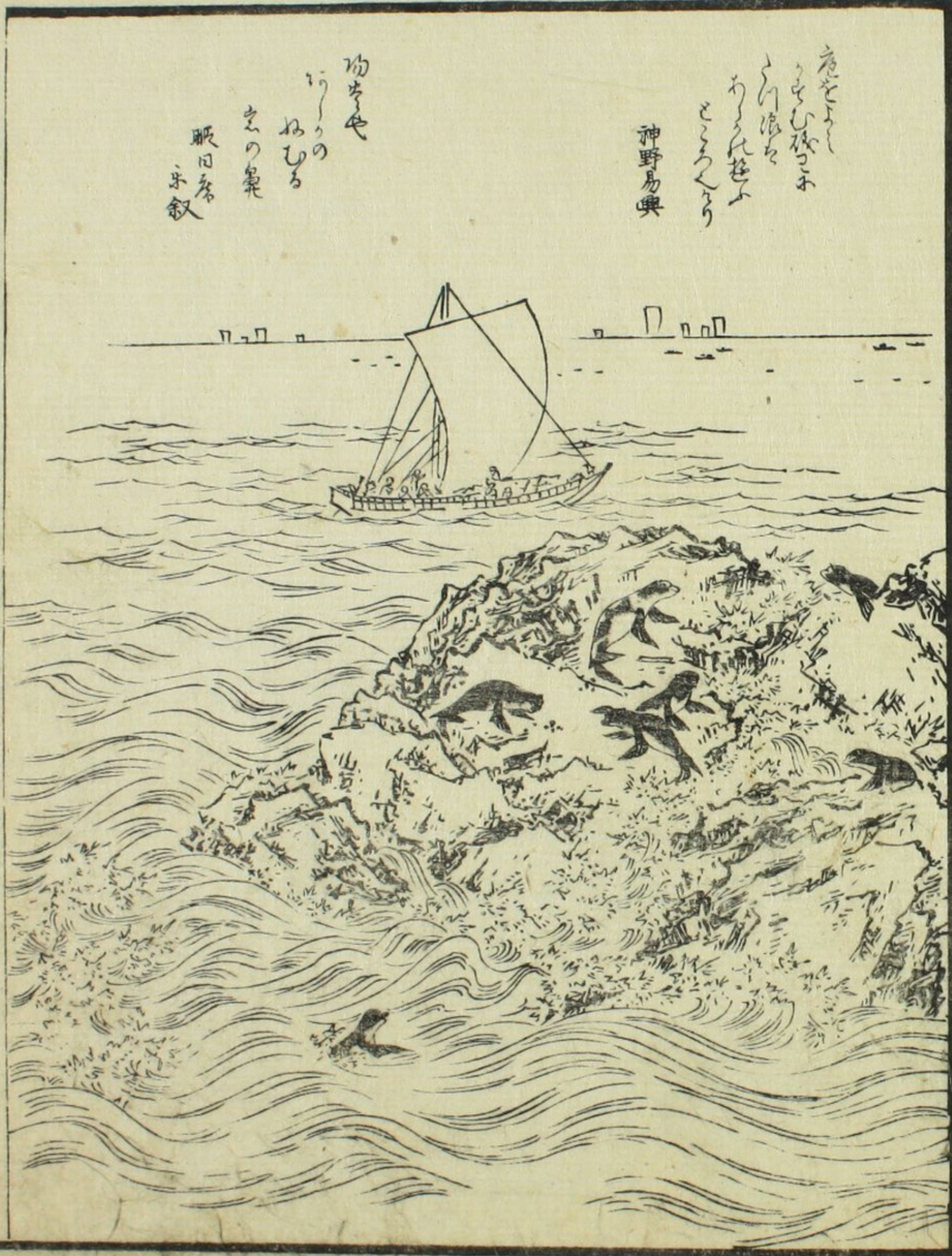
舞洞蓋水石相激而為異響已

白崎之頂太古霜化為石骨更蒼涼萬崑如荀抽海底累々  
層秀瑤芝房神劔鬼剗誰費力造化秘伎洩天藏石門巍然  
開雙闕水精劉成仙人狀龍乎虎乎呵巖扃洞天雲深日月  
長人謂此中坐千人清淑氣凝鍾乳香坤靈始鎖高唐女夜  
靜每奏神巫舞鈴々金響瓊枝折回波鏜々鼉尾鼓知是鼇  
足定四極南維別鎮群真府幽室必有藏碧錄好搜金簡夸  
神禹只愧煙火薰此身隻擲凌波遂難臻怒浪簸舟輕於葉  
塵蹟豈容攀嶙峋豁然自悟笑拳白更注餘瀝嘲海神自古  
誰得東海藥譁張弄舌誰暴秦漢皇望洋嘆未止茂陵風雨  
入荆秦雖令餐氣老不死亦是巖穴枯槁人一揖辭汝我可  
歸金銀樓臺爾自珍

海懶鷗

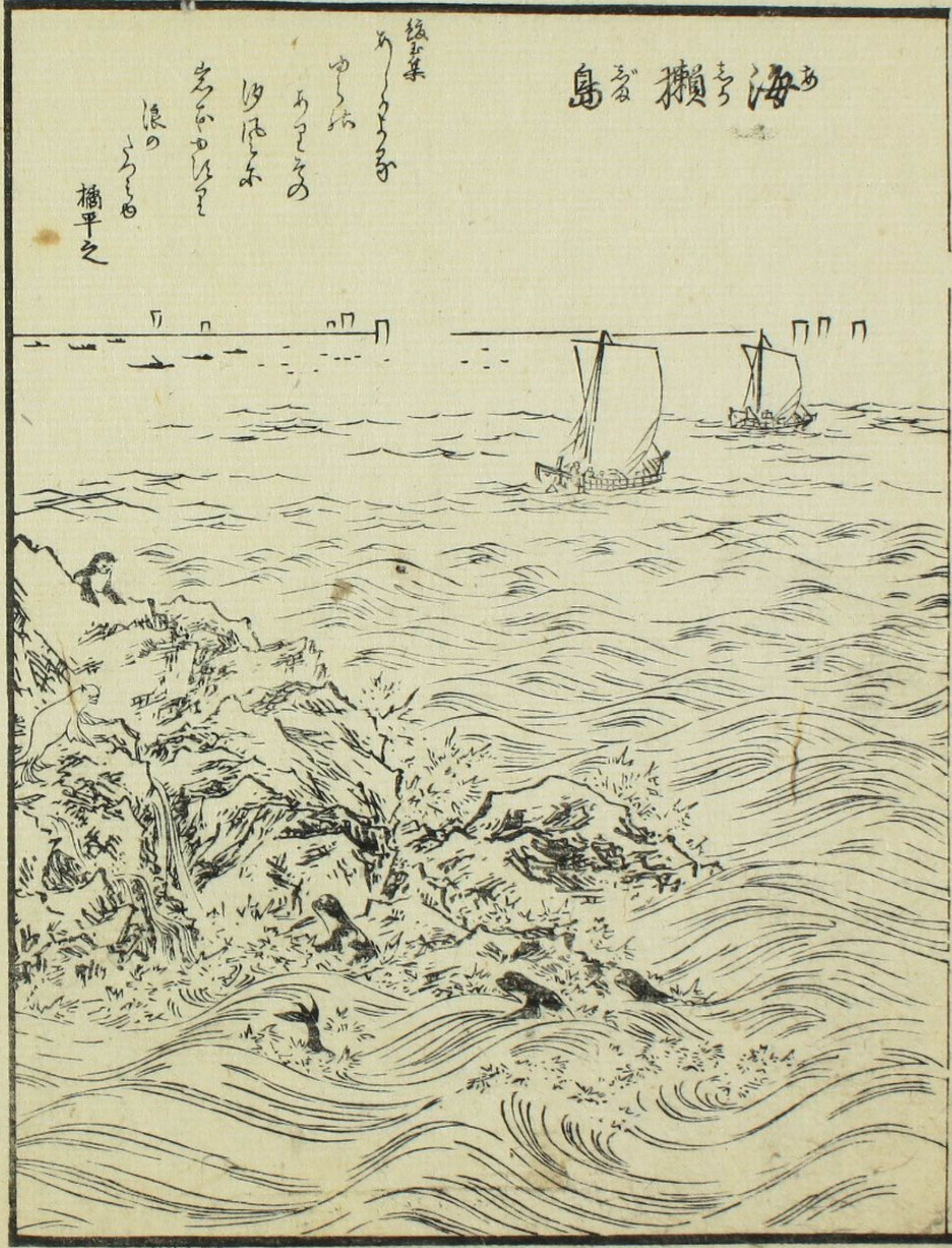
白埼の沖小つり以傳と白  
埼とのるど海流此あり

海懶を海中れ歎めせのて小つりなもれを去さぬ六尺大なる  
もれを一丈二三尺小及び其形を既小く口尖り歯  
牙を大小似り目大小耳小く吻くち横い粒ちく去り金  
身なま短毛なまつり毛なま不なまをなま柔なま絹なまはなまたり又白なま多なまて白なま野なま  
久なま養なまつ思なまもなまつり左なま右なまの扁なま髻なま凡なまつり末なま小なま波なまつり  
尾を歎尾のゆくあなまくなまくなま尾を按なまて又なまあなま好なま毛なまつり毛  
小も凡なまつり毛なまて末なまを分なまけて拵なまのなま——  
毛なま以なまて毛なまを授なまて皮なまを符なまと馬なま具なま字なま小用なま肉なまを魚なま  
毒なま小なま柳なまれなま子を組なまし他なまを治なま多なまし脛なまを令なま養なま小傳なま  
て功なまつり毛なまつり毛なまはなま歎なま毎なま秋なまの去なま用なま小なまつり毛なま方なまより毛なま  
アなまくなま其なまの去なま用なま多なまくなまはなま小居なまて以なまてなまつり毛なまつり毛なま  
或なまらなまつり毛なまはなま流なま地なまを去なまるなまるなま毛なまをなまつり毛なまつり毛なま  
物なま起なましなまてなま竊なま小授なまへなまらなま流なま患なまかなまるなまをなま知なまりてなま年なま々なま小



功を  
 ねむる  
 名の集  
 眠日  
 叙

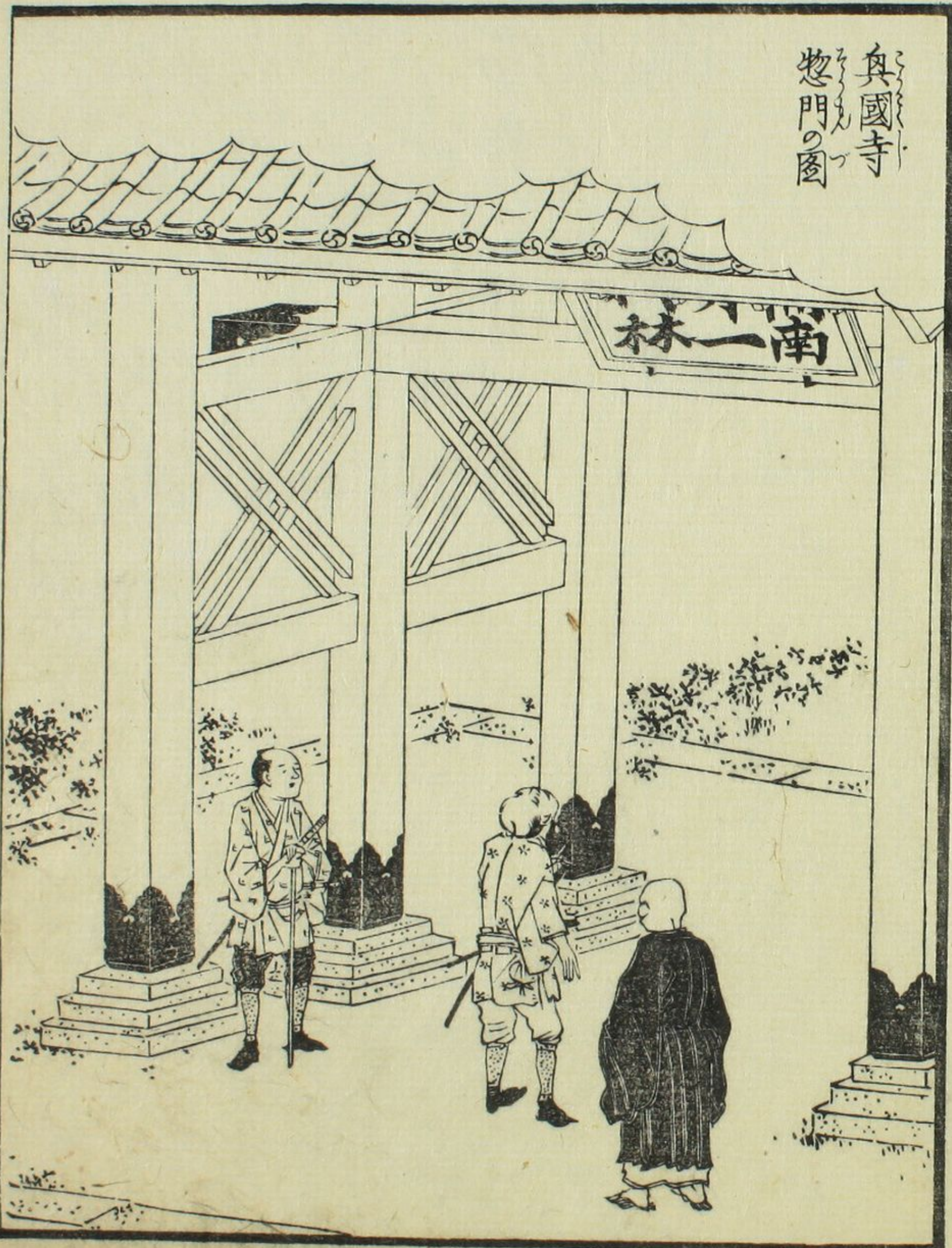
神野  
 易典



海  
 瀬  
 島

後  
 橋平之

眞國寺  
惣門の圖



継来とてつらんといふは海之版小分れて周也三町餘の岸あり  
 海撒二十尾毎子取抱一或ハ海中不出没一魚と捕て食とて  
 在子鳩中録抱振舞とて臭氣を惹むべ一以者致す海く  
 眠子就といふも一個ハ其起て是と看漢次る子最僅るなり  
 人ありて以子近づまハ急を仍して元と起一或く海中  
 没入次海中と潜く時ハ急と起一海と死して畏ハ急なり  
 官命此外扱るると其次實子南海の一寺物あり

大浦  
由良莊

白崎神谷神の間の灣小浦は村の南小磯の東後の東若東若老若人ふるや  
 ハケ村を流る中右蓮華王院あり  
 東鑑云

文治二年八月廿六日庚子於蓮華王院領紀伊國由良庄七  
 條細工宗紀太構謀計致濫妨之由領家範季朝臣折紙並院  
 宣到来之間今日令下知給之云

鷲峰山眞國寺

衣浦浦上と云城女四丁條門森村小なり釋宗隆海流  
 妙心寺末子一て幸小中末子九十九ケもなり





法燈國師木像



葛山五郎入道木像

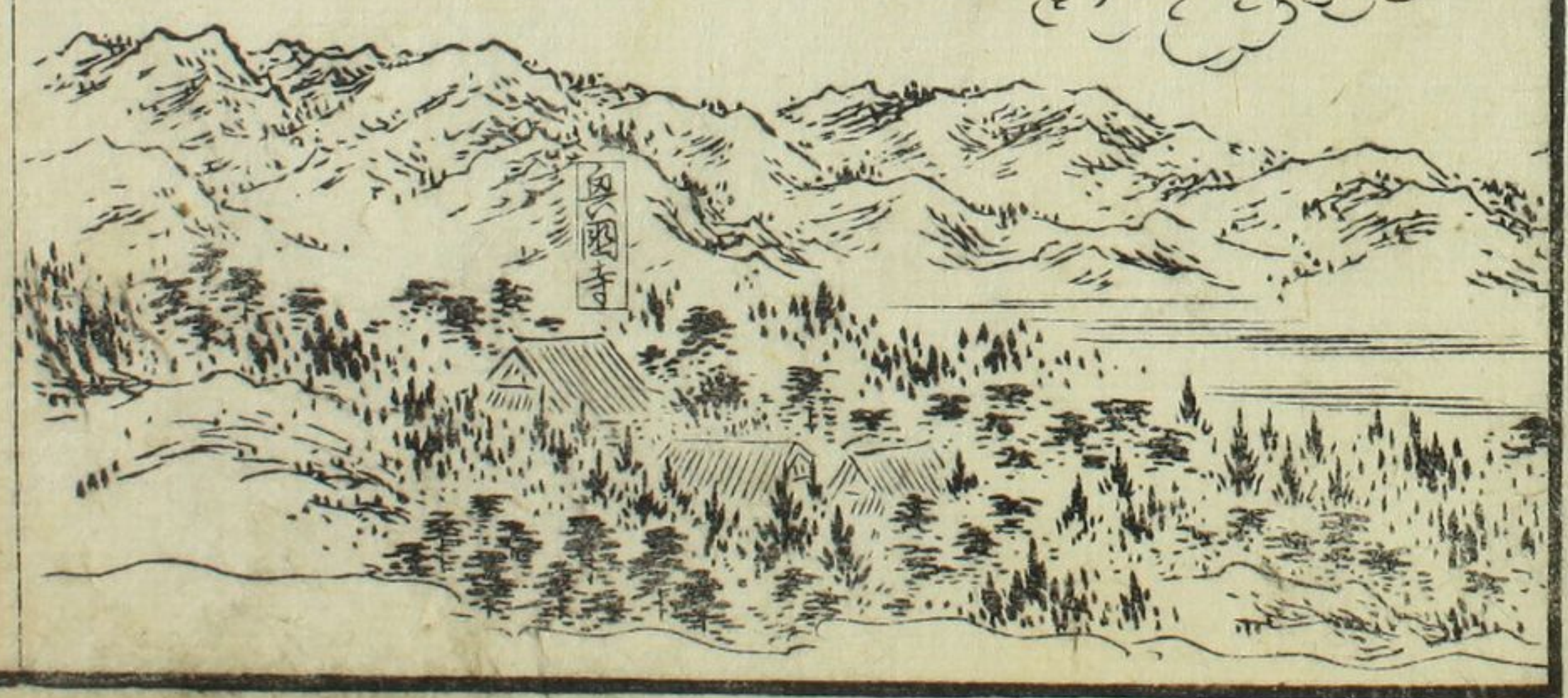




寄附次願性（願性）を（願性）して丸別の人（丸別）二郎入方西入り遇  
 ひし西入將軍北洲頭（北洲頭）に骨懐（骨懐）せずを丸出（丸出）し願性  
 小与願性（願性）を感謝（感謝）志（志）當寺小安於石塔（石塔）と建  
 て御骨（御骨）を安（安）梅尾（梅尾）の惠上人（惠上人）願性（願性）西方（西方）の寺  
 号と授（授）承平（承平）此道元（道元）淨沙（淨沙）法師（法師）にて篆文（篆文）して願性（願性）と  
 書せし心（心）折（折）由良（由良）左（左）方（方）の修（修）院（院）法（法）宮（宮）北洲（北洲）の  
 御代（御代）友（友）の淨王（淨王）左（左）邊（邊）能（能）入（入）方（方）西（西）邊（邊）願性（願性）と云（云）同（同）し  
 以願（以願）の地（地）若（若）干（干）と當（當）ち（ち）と（と）せ（せ）て法宮（法宮）北洲（北洲）善（善）提（提）不（不）次願性  
 善（善）て（善）西（西）沙（沙）入（入）宗（宗）（沙のり時流華林ち天祐淨沙小春せうれい小天祐二僧を引て  
額加れい一曰字通工夫復善力從門入者被入臨三條椽下容身易  
六尺單前參話難退歩速觀明歷々運思近覓黑漫々銀山鐵壁雖無路透出透來且自  
看其二曰火道本然何費功不通一步欲能通盧談萬物皆無味身靜諸緣盡在空法界  
聖凡非念外微塵刹海出胸中入疑個事吾應答  
野草春來華自紅延堂傳燈錄）の志（志）所（所）を（を）知（知）つ（つ）て被  
 將軍（將軍）れ（れ）分（分）骨（骨）と（と）存（存）傷（傷）山（山）に（に）被（被）り（り）ん（ん）に（に）紙（紙）託（託）次願性（次願性）を（を）  
 託（託）して（託して）室治（室治）の（の）年（年）二月（二月）は（は）地（地）より（より）紙（紙）を（を）託（託）して（託して）九別（九別）小

赴（赴）き博多（博多）津（津）より（より）高（高）船（船）小洲（小洲）に（に）宿（宿）ふ（ふ）小洲（小洲）に（に）宿（宿）ふ（ふ）  
 寓止（寓止）し一字（一字）に（に）書（書）紙（紙）建（建）て將軍（將軍）れ（れ）志（志）骨（骨）紙（紙）等（等）身（身）託（託）る（る）  
 の肚（肚）内（内）小安（小安）次（次）又（又）無（無）門（門）私（私）尚（尚）小稱（小稱）意（意）と（と）向（向）ひ（ひ）し（し）尾（尾）左（左）邊（邊）と（と）願  
 て御（御）代（代）の耐（耐）大洋（大洋）中（中）あり（あり）腮（腮）風（風）に（に）遇（遇）氏（氏）路（路）度（度）没（没）せん（せん）に（に）師  
 致（致）く（く）親（親）喜（喜）紙（紙）意（意）と（と）向（向）ひ（ひ）し（し）小忽（小忽）大（大）の日（日）搦（搦）橋（橋）上（上）小祝（小祝）じ  
 て風波（風波）紙（紙）小収（小収）し（し）と（と）其（其）後（後）沙（沙）比（比）地の務（務）京（京）を（を）乞（乞）し  
 終（終）身（身）れ（れ）志（志）所（所）を（を）託（託）ふ（ふ）と（と）紙（紙）託（託）二（二）年（年）願性（願性）相（相）託（託）して（託して）宇山（宇山）恒（恒）持  
 紙（紙）託（託）と名（と名）づく（と名づく）（高小先師張例私尚分善せし因南集小年寺四号  
西方寺善山系倫法祖為并山通換今名也）  
 奇湯（奇湯）志（志）所（所）を（を）託（託）ふ（ふ）と（と）紙（紙）託（託）二（二）年（年）願性（願性）相（相）託（託）して（託して）宇山（宇山）恒（恒）持  
 次（次）飛山（飛山）後（後）宇山（宇山）多（多）上（上）宮（宮）所（所）を（を）後（後）縁（縁）の託（託）文（文）小託（小託）る（る）孫（孫）要  
 を詢（を詢）ふ（を詢）ひ（を詢）し（を詢）其（其）時（時）沙（沙）年（年）と（と）紙（紙）託（託）ふ（紙）八十（八十）小紙（小紙）託（託）る（る）れ（る）ども（ども）奏  
 對（對）志（對）所（對）を（對）託（託）ふ（對）と（對）紙（對）託（對）二（對）年（對）願性（對）相（對）託（對）して（對して）宇山（對）恒（對）持

法燈寺の使僧二人上別赤木山に  
 して大天狗松の坊に詣り當寺  
 再建の物後をくま松を平敷より  
 二堂の山臥し屋まで香を  
 とびへりしやいふ事好著  
 写集小教一見たり



法燈寺



興國寺に藏はる所の聖徳太子一代圖古画の中抄出



其二

一十八番





躑躅畫像一幅

寺記小法施の身子疏山画之小所の像を画しりて躑躅子  
眼を法入所と云く有眼を懸る以疏山画像と云て  
契済と連名され借物小所と云く小所を以て疏山  
アトて寺と下以て躑躅子と云く小所を以て疏山  
像の正正を先以て懸る一懸る以て懸る以て懸る  
を夕以て懸る大子懸る以て懸る以て懸る以て懸る  
アトて画像と懸る中不述へて懸る以て懸る以て懸る  
以て懸る以て懸る以て懸る以て懸る以て懸る以て懸る  
以て懸る以て懸る以て懸る以て懸る以て懸る以て懸る

龍女寶珠一顆

寺記或時一女來りて少小なりて善哉戒を授け三日  
果して三百代及雷電一とされ東南北地小光眼を授け  
を淨られば是を海より一顆を此小所懸る以て懸る以て懸る  
物一顆ありと云く紀國造殿文  
かあ珠記に記し決りし出次

唐經親善像一軸

佛舍利二粒

終粹一口

善子法施小所

唐代作羅漢木像一軀

後湯成院御書

雪徳太

子二代圓古画一幅

其外和漢古書画教百幅名品尤多しと

之ども頗る多し今畧次又那賀那賀寺小所  
此小所飾る文書什寶教品とも多しり延寶傳施録小

文慈初奉佛眼よるれ書母小法衣一頂七葉圖一箇

〜〜〜裁〜〜〜今傳〜〜〜次惜〜〜〜

此書度寺の那賀  
於於河本松極村

鶴峯十境

十境の偈ハ七五れはあり元在元年仲秋社寺といふ僧の寫一玉  
けれを奉幸〜〜〜享和年中正二徑菅平胤長との云せり

傳衣室

酒琴巖

標榜樹

如意峰

廣度橋

伊法厩

平等塔

座禪石

新沢洞

靈源水

坐禪石

坐禪石中不あり

年傳子云坐令坐此上小鏡石りりし洲あり小鏡  
て日鏡書〜〜〜侍傳等洲に傳〜〜〜多と失ひて於  
鏡石れ畔小洲る小鏡書大士儀然〜〜〜しりり  
傳傳〜〜〜て教を授一書〜〜〜れハ本所小鏡〜〜〜り  
〜〜〜坐禪石〜〜〜り

普化谷 入 ちんばく 風谷比ふり又

國師歸朝の時法普國法理正宗怒とて其居士とて  
うつて治室を嘗てめては普化居士とて居士ハ  
所謂普化宗法派の虚無僧の濫觴と志す其徒等相つて  
て位せし正火此後法團小難教して今々普化谷の  
名れし勢とて

関南集云開祖自宋歸時有四居士相從參禪之暇皆好吟尺  
八輩於船中有首領海霧冥濛弄二曲以寄道情遂以霧海路名  
其曲到山之後職皆司浴院云浴院旧址稱普化谷蓋居士有於普化明頭  
未因錄契投者故名今宗其道者亦以普化為祖乃俗所謂虛無僧是也

因予の虚澤傳記予亦師宋此後予守ていつし耐普化律  
昨十と其れ疎張泰予虚澤ハの一也と授て歸朝の後予子  
寄牛小傳又亦仇理正法普宗怒の四居士も此後とて予  
後予寄牛仍師の志とて此地を去り乃諸の家毎小いきて  
後予一人小知りて一とて此宗怒とて今予の  
本も教十ヶ寺いつて新冷法括惣派寄牛派小葉派小也

紀四編四六十四

瓜板地瓜字流流く分れくが中予治東此の晴寺ハ當ち  
此末寺小志て其寺法嗣ぐもれ也あも小末いつて  
授戒とてるら由派小よれるなり 抄入り虚無僧の字知進を  
牙合少々舊僧とカ一判  
何小董僧の二味紙さぬ者小く事而捕獲小法多支條のつ戸小よつて天  
ハふく外わりの業のさもれりやうとらて七十一番敬人者合合小  
も亦舊僧なり

開山堂聯

語要傳聲 字法雜軌範

行須緩歩 習馬勝威儀 徑山無準

大 門 額

關南  
茅一  
禪林

天泉山住宋泐書

中 門 額

鷲峰山

竹友年七歲書

紀四編四六十五

開 山 堂 上 階

白 若

夾山

全 下 階

沈 重

王龍梅洲

全 無 門 和 尚

錦 枝  
葉 茂  
無 窮

古深香汝一山一寧

佛殿聯

鷲峯法鏡照曜  
萬丈之光燄

龜山重巖  
古梁友揮  
千秋之德輝

禪堂前門

海會

幸魯盛典總裁官太子  
少師  
黎封衍聖公孔毓圻

呼 殊 亭

呼猿一石架在飛來石  
山圍翠巖林松古鏡  
手寫巖溪可應夕步趨揚  
境殆壓蒼崖渾成之夏  
掛鈎筆峰白塔  
三石洞末直溜石為風  
致招猿母表幽堂不色  
就心一絕  
千多石此末小乃余作楹  
遂恰以理之泥石在年表  
呼猿象自在新崖台  
尺松

嘉亦子題

南風雜集

過興國寺并法燈國師像  
師去知何處高名今已傳  
斷碑橫草際靈塔倚松巔  
山學

僧法霖

維摩默雲參伽葉  
禪登臨時極目空  
盡界三千

關南集

法燈國師贊

僧默洲

昏衢法燈迷津寶筏威風凜  
以滿地秋霜光明赫如麗天

日月初西海兮入無門  
閑歸東土兮開春閣  
岬住山當卓錫杖  
妖魅頓潛說法感兩寶珠  
迅雷忽發敢讚一辭罪當

借越夫是之謂三朝一國之師表  
五祖七世之的骨吁盛矣哉

將軍記云

明德二年二月山名修理亮  
我理力と失ひ一族即坑  
六十二人  
給ふ事つとく由良  
此湊小にらる  
與國さ此公智上人  
をそ  
出家して皆ちりりく  
小松りりき

家集

與ふとく右つての  
松とて

勢れ事ぬね  
昔の事  
ふとく  
ふの事  
も  
源令綱

四

河  
流  
く  
善  
せ  
る  
花  
の  
本  
ね  
より  
入  
お  
れ  
淨  
の  
事  
也  
全

恒昌尼寺 真圓寺の東南  
七丁許小祠あり

法燈小所 奉持小文 永二年 少六十 業此 時神 純小  
て 恒列小 幼く 母堂 誠推 孝を 孝に 尚寺 以南 尚寺 以南 孝を 孝に 尚寺 以南 孝を 孝に

名天神社 中村小

白山権現社 日村の北

東泉寺 日村小祠あり

関南集

遊東泉寺詠 霜薄南中紅葉稀獨憐楓樹映禪扉霞標近接天台色

僧默洲

雲錦新成織女機且訝技々燈火點又看片々雨花飛  
人間縱有停車賞爭似開窓對落暉

妙見宮 如村小祠あり

長谷寺 日村小祠あり

同村小祠あり 珠石山とつみ 貞小寺未なり 妙見宮の地あり 長谷寺あり  
傳云法燈寺の純神小菩薩戒を授けを授けし 長谷寺あり 珠石山とつみ

地小あまの運を 大木必長谷 紀事同 飛の 像を 幸す 地中 小祠 飛の 像を 幸す 地中 小祠 飛の 像を 幸す 地中 小祠  
紀國造淑文の 珠石山とつみ 貞小寺未なり 妙見宮の地あり 長谷寺あり  
の 長谷寺 小祠あり 珠石山とつみ 貞小寺未なり 妙見宮の地あり 長谷寺あり  
て 室中を 入れば 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり  
ぬ 手及 移る 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり  
う やく 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり  
ゆ 或は 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり  
かの 殿を 抹る 者 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり  
を 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり  
れ 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり  
の 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり  
て 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり 希き 光あり

秋日 同諸子 遊長谷寺 率中 楷公 見跡

同袍秋日 叩禪扉寂寞 林丘 人事稀 習靜原 知塵外 是

論心 寧比 世中 非遠 蒼雜 樹鳴 蟬乱 出岫 孤雲 倦鳥 歸

更有 瓦爐 鴻漸 趣茶 烟片 逐風 飛

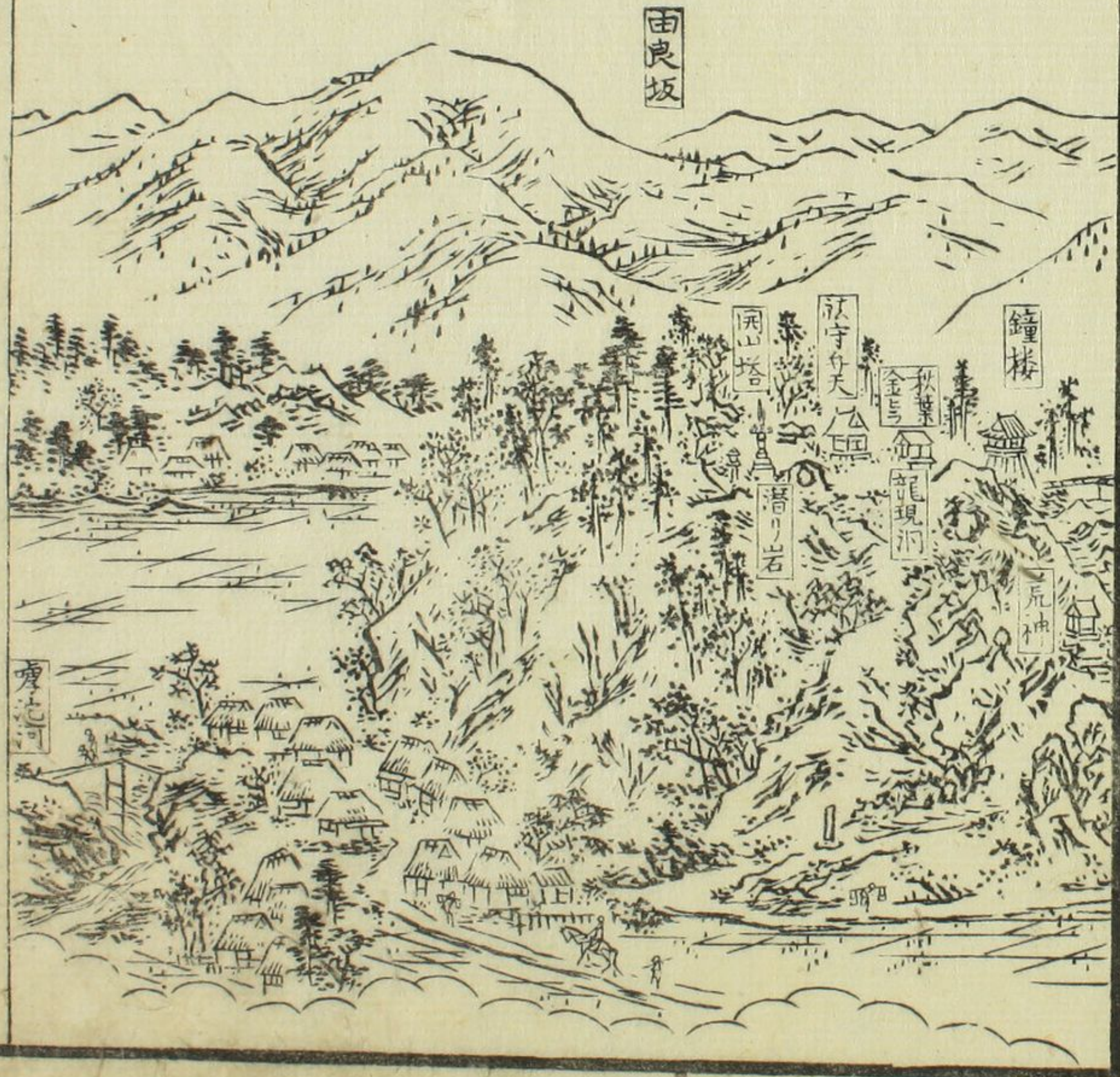
御啟

細代村小祠あり 元和此 頃建せり 今なき 故小祠 貞頂の小祠あり

長谷寺

鈴屋集

山にゆき  
あそびふたや  
たまごころ  
かみ乃きり  
まのゆき  
本居宜長



家集 細代乃市正業此巧とや  
よ勢之波(音)ふくま〜〜〜  
南良此湊小源令細

橋鴻 湊内小所河  
戸村三發以

法院園師傳於此日祝別とつみ所小湯杖と紫山とをこれ  
且湯杖と籠と化して夢里此波濤小湊泳一紫山と果  
龜北背上小負ひては鴻小来とつて杖小杖を游泳と夫と  
名づき紫山と紫山と名づくは龜の尾下小所自  
境字淡書一海中小致ちく女也紫山と田那津井本  
浦小止ま海づ〜といこれ小教の如く彼地小下つ〜  
主浦を龜鴻とつ〜とつ〜年湊縁起も小海より  
もけり  
我り  
撰集抄  
〜頂紀傳中〜此を記をさ〜法道く約記漕  
よせ〜四十ふ〜十斗小〜男の船の〜小る  
存〜い〜慈を慈〜と表小〜海くあふかり〜  
た〜小れつ〜い〜何を〜歌〜と〜小は男は〜す〜

紀四編四六十九

これと約され者小侍も古今は浦あり殖小大がれ龜れ約これ  
てつれを殺さん〜つれ小龜九君の服より紅の涙とるか  
〜殺〜く〜これん〜つれバ〜小悲〜  
本れ小もる〜つれ残つれの物人一刀あ〜目とつ〜  
てつれバ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜  
免〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜  
ら〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜  
が〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜  
〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜  
逸小於小〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜  
〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜  
もつ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜  
つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜

家集 名ゆ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜つれ〜  
源令細

柏村 志安居不存されども由  
良れ湊の由る小所  
沙樓神社 日村小所〜氏林を知信の時年〜榊さ〜来れり  
人を祀れり小よる〜榊さ〜

小杭 志賀屋の石名をいれども杭

宇佐八幡宮 横濱村よりりふ村の産古津より法燈園所自筆の持札なり又宇佐

年の持札小奉納存置つ利源依社津之板と堂屋とに記し津之板と堂屋と  
の八郎実細の法より又法燈園所自筆元享元年興園寺新創の條小津王某  
入乃西宮と板の上令吾宗正法名河金由良屋内按於任職なりといふ  
も尚春の担るく一尚社持札より社名の名連珠と云ふことあり

法燈園所筆云

建治二年十二月十七日濱宮奉遷神体於新宮之次師將願

性 葛山五郎 遺付宝鏡一面納于神殿云

由良湊

横濱村を抜て九右此出押三十四好海向小き出極つた大凡二十町ふ及び  
赤毛とてはる小湊海流川多多くしりて海舟楫の用を起せしむる  
勢男今小倍せんも代をよとて去人と情あり由良の戸由良の所由良の湊  
み又同不なり八を抄抄以下奉公の名所とてを正しとて之を熱心  
骨根好也かゆく此産をよとて奉公の所とてを正しとて之を熱心  
くはそとの中を海流の向くべしバ同名実ふとまぐ一但熱心の中骨根好  
を奉承中々奉公の由良の侍をよめれもこれと池とまれぬらぬ  
万葉集小由良の侍とよめれぬらぬ浦の出押のやゆかれども出押あき舟葉り  
玉を拾へべしとてはる中良の侍をよめれぬらぬ今湊とよめれも侍とよめ  
と湊とて下小載はかかぬ地を  
よめれぬらぬとてはる中良の侍をよめれぬらぬ今湊とよめれも侍とよめ

いしりく大なる人の玉を拾ひ湯等れ三崎と中頃より

由良此戸とも中頃の湊ともいふ今ともく由良此戸と

ゆつりたれはくともむりく分れり横濱と川尻をいふ

湊此門あたる横濱と一里許の浪海を濁し向ひ河戸

柏の二村を南谷小松と横濱と二むらの間とて

出く年ふ家松小松海流負一龜れ放りとも中頃くみさこ

ゆつりたれはくともむりく分れり横濱と川尻をいふ

湊此門あたる横濱と一里許の浪海を濁し向ひ河戸

柏の二村を南谷小松と横濱と二むらの間とて

出く年ふ家松小松海流負一龜れ放りとも中頃くみさこ

ゆつりたれはくともむりく分れり横濱と川尻をいふ

湊此門あたる横濱と一里許の浪海を濁し向ひ河戸

柏の二村を南谷小松と横濱と二むらの間とて

出く年ふ家松小松海流負一龜れ放りとも中頃くみさこ

ゆつりたれはくともむりく分れり横濱と川尻をいふ

湊此門あたる横濱と一里許の浪海を濁し向ひ河戸

柏の二村を南谷小松と横濱と二むらの間とて

出く年ふ家松小松海流負一龜れ放りとも中頃くみさこ

ゆつりたれはくともむりく分れり横濱と川尻をいふ



由良湊の圖

内東名所百首

その名の 宝家

つわいのしるし

さしつゝあはれ

ゆゑのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

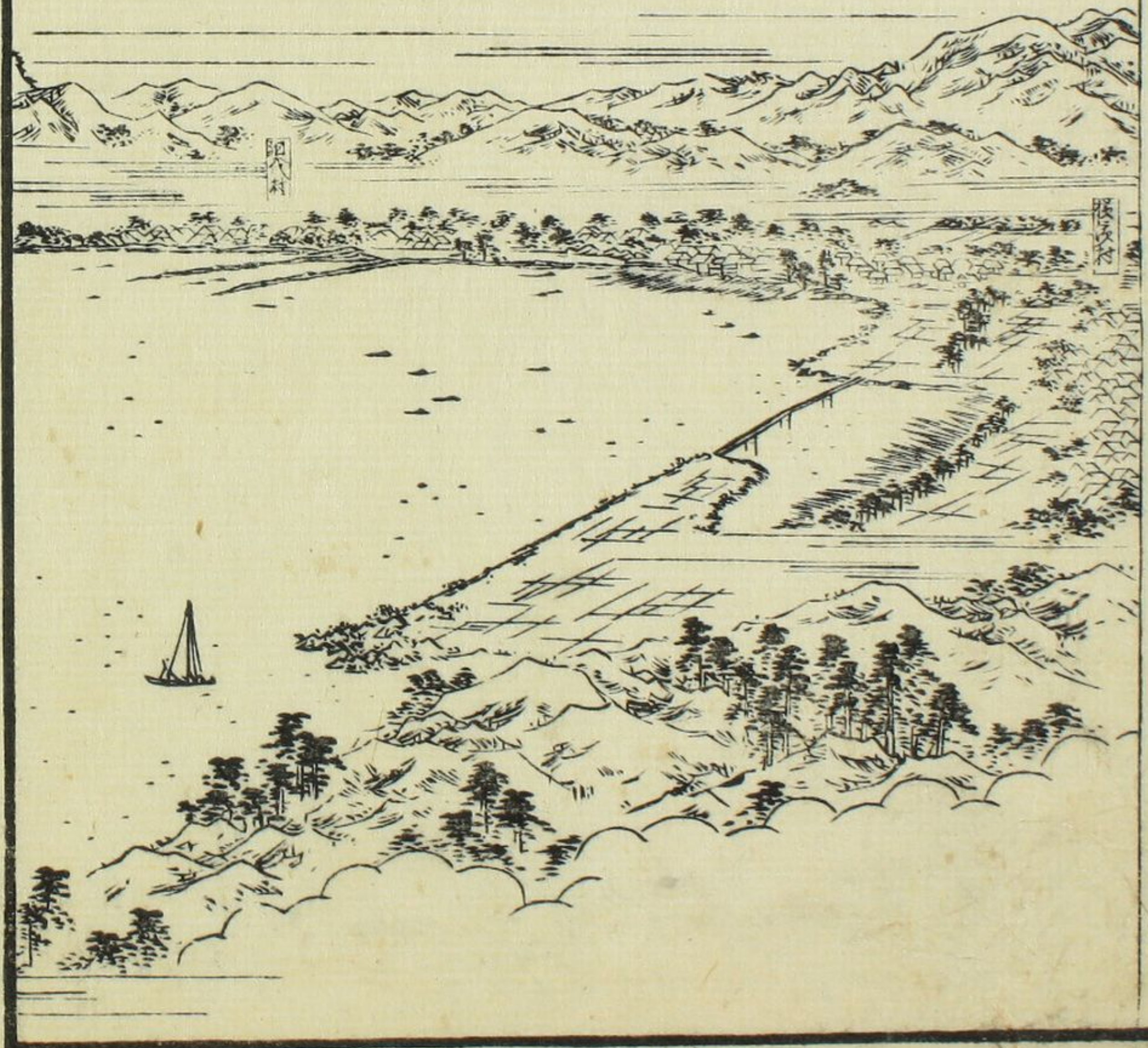
まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

康光



紀四編四七十一

皇山皇尊

紀のふや

ゆづりつゝあはれ

やまのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

まのしるし

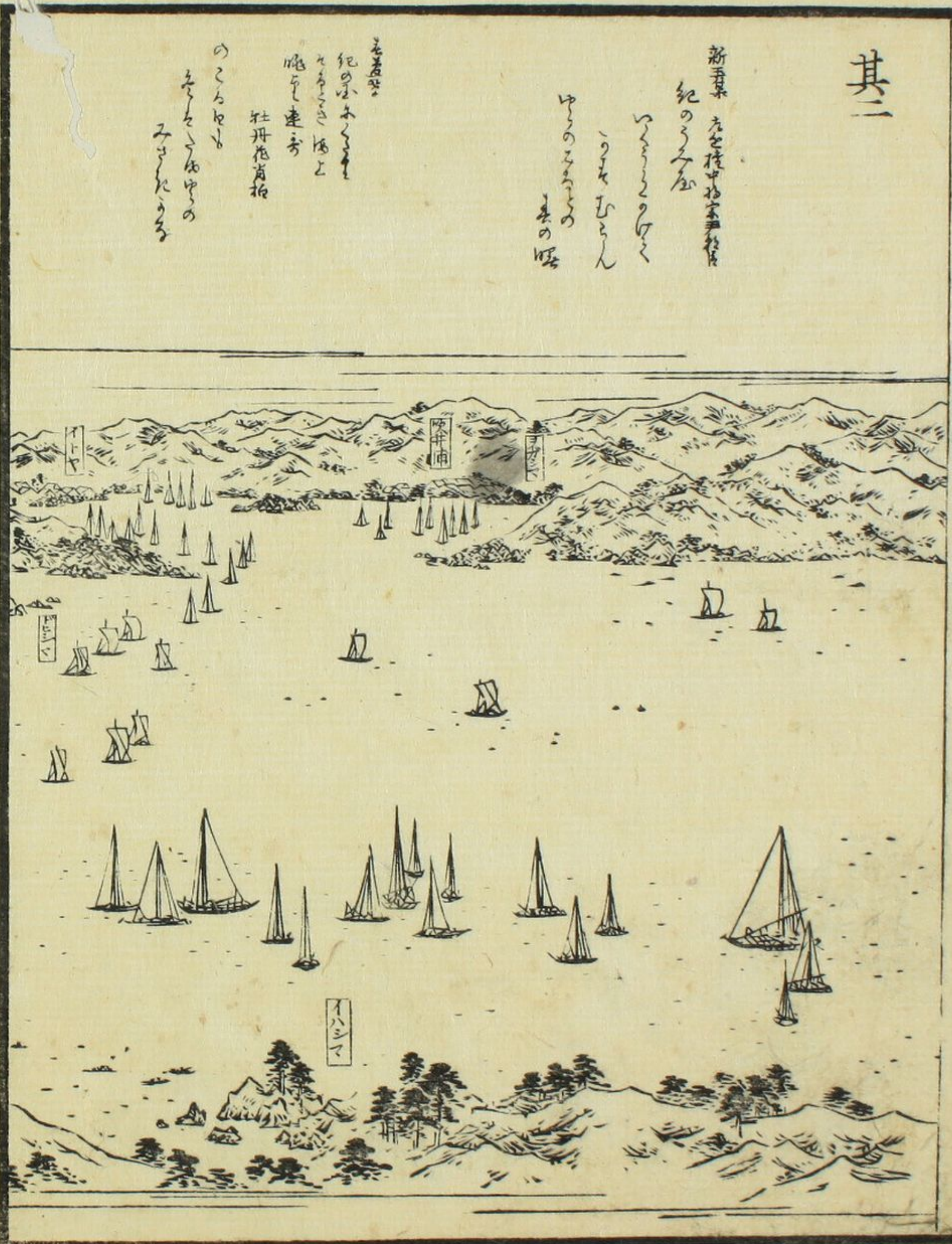
まのしるし

まのしるし

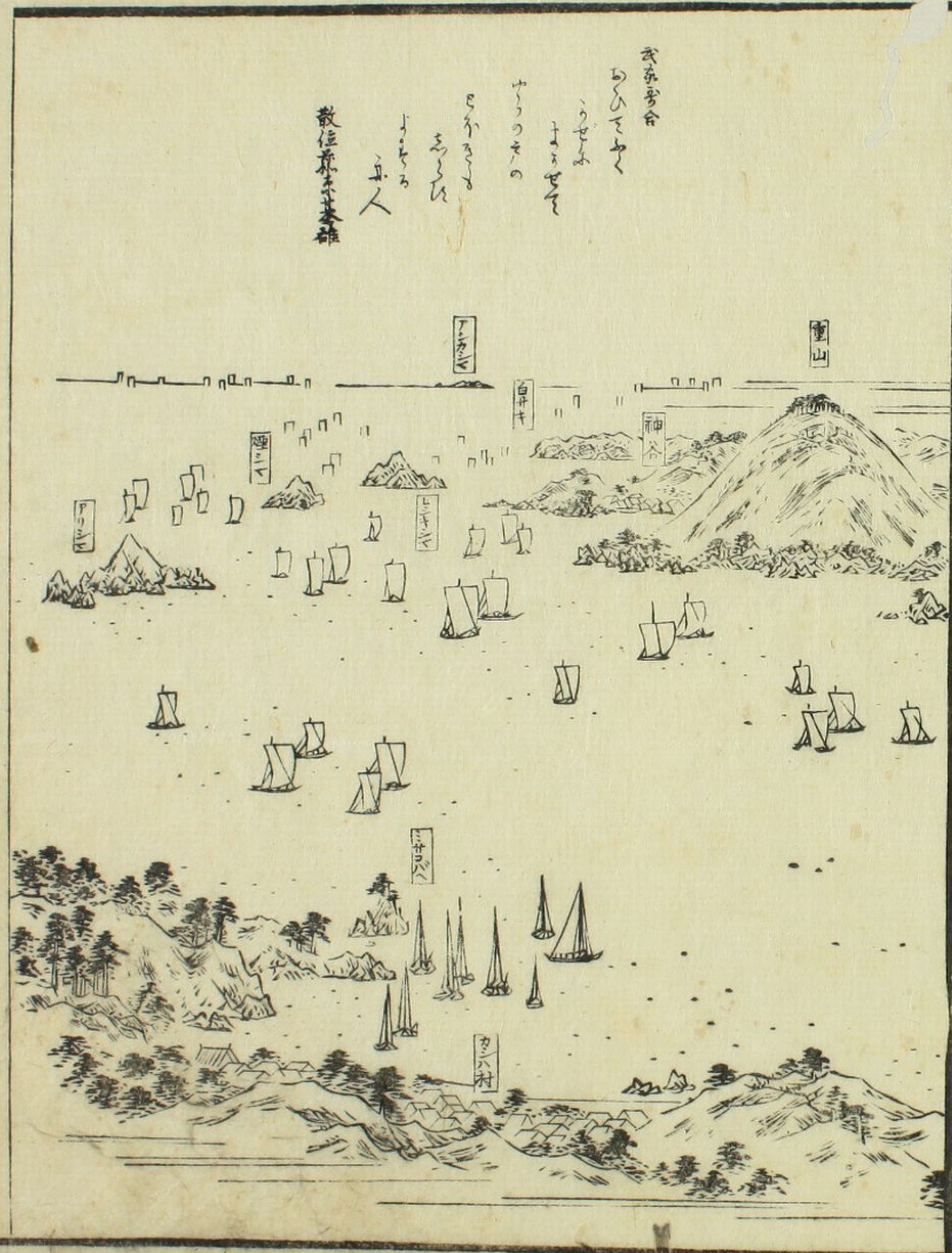


平政村能長

新吾 老を授けぬを頼む  
 紀のろくろを  
 わんごろろ  
 けいごくごん  
 けいごくごん  
 むのけい  
 紀のふくごん  
 れんごん  
 紀のふくごん  
 紀のふくごん  
 紀のふくごん  
 紀のふくごん  
 紀のふくごん  
 紀のふくごん



武家野合  
 らひてや  
 けいごくごん  
 けいごくごん  
 けいごくごん  
 けいごくごん  
 けいごくごん  
 けいごくごん  
 けいごくごん  
 散位



や一侍れ系屋の存あわらね宿ととく浪のしきののか  
ふさめふくく神つ告げれ押と漁火の體行河由がある系  
尾葉葉のあらるとふ並つくあももととと一一尾を神神  
答れ中間上らとと雲井小ととと大山とと項一とと乃  
あままとどりく今の清人の政子賦としい山奥園寺  
孫起小並山と書一又端山と鳴がらがふとと尾上  
よられ眺をいとと中とおらうらいととと一一城傳のをら  
あらうらあらうら歌波とりう大船の出入絶るるらうく  
あらうら船の志ととととと浪ふられとととと要の  
ふの系波あひおられらととととととれ白ひととととと  
さもあらうらあれと補一ととと系極美門のじうとと  
志れをれとととととととととととととととととととととと  
万葉集イモカ 攝政タマ 作ヲ  
為妹玉乎拾跡木國之湯等乃三埜二此日鞍四通

紀四編四七三

同  
大宝元年辛丑冬十月 太上天皇大行天皇幸紀伊國時歌  
朝開傍出而我者湯羅前釣為海人乎見變將來

新古今集  
紀もやゆられ淡小拾てふをらうとととととととととととととととと  
續後撰集  
玉拾由良れ淡小拾てふをらうととととととととととととととと  
続古今集  
この小由良の押の月流ととととととととととととととととと  
玉拾由良れ淡小拾てふをらうととととととととととととととと  
新古今集  
紀もやゆられ淡小の朝朗あれ危小并漕らとととと  
夫木抄  
きれふやゆられ浦風おとととととととととととととととと  
内裏名所百首  
紀の河の由られ危る渡船れ押らうととととととととととととと  
楓吹ふあらまとらうらけと由良れ押の照やのとととと  
内  
流くふあらまて紀もやゆらの押と淡る船人人  
秋らうら本葉流もらうらけと由良れ押の照の月の月  
金槐集  
打てて秋のしらととととととととととととととととととととととと  
推中納言長方  
平重時朝臣  
源師光  
前内大臣通  
後小松院  
安嘉門院四條  
民部卿為家  
順徳院  
兵衛内侍  
順徳院  
鎌倉右大臣

南朝五百番手合

沖つ風浪吹きて記のふや由良はたつてぬ夕言のま

関白

日

夜子こく由良は押の波風小まをわらうとくは御中

左衛門尉長親

日

由良はるを漕ぎてこれる夜のみ飯を小まをてぬは

慶運法師

日

中これや浸漕出るかられ者もさふまむ屋のち

宗祇法師

河内

村才小浪迎氏別荘の地なり

日

玉拾ふ由良は浸の世軍もまふくも飯のわのくを

源朝臣令綱

日

泊舟由良は浸の浪杭まむむをそそりて頭おとし

日

風をみゆこれ漕ぎ月氣小はくもまを浸りきりあり

日

ねねとて八まはれを漕ぎてこれ浸のまをくいつれ中人

日

をこれ中みまをく極を浸れ小まをてそそりてまをぬ下

富海 以野浦の海上小はり小の

教専寺 河内村小はり河

紀伊名所圖會後編卷之四終

紀四編四七四

